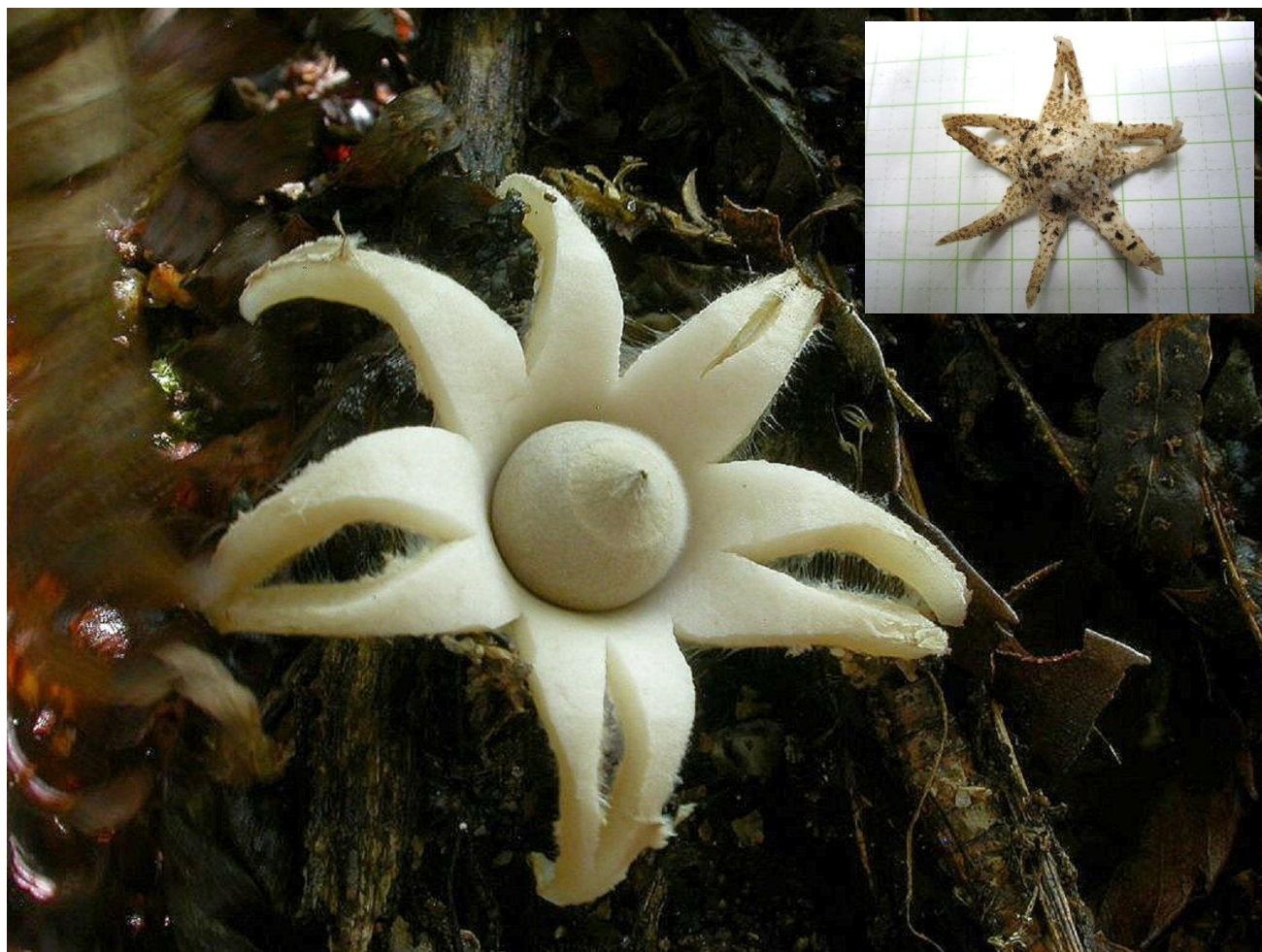


関西菌類談話会会報

2021 年 2 月 No. 43



目 次

表紙：チヂレツチガキ <i>Geastrum corollinum</i> (撮影 小寺祐三)	1
スッポンタケの観察	奥村淳・2
盆栽に生えたきのこ	萩本宏・6
ヨーロッパのきのこ図鑑の紹介 (2) 孔菌類専門図鑑	佐野悦三・16
きのこの和名にまつわる昔話 ～アイタケやハツタケなど～	萩本宏・19
フクロタケの仲間の観察	谷口雅仁・34
談話会便り	44
会報記事投稿のご案内など	編集委員会・52

スッポンタケの観察

奥村 淳（愛知県日進市）

スッポンタケ (*Phallus impudicus* L.) といえ
ば、子実体が未熟なときは白く丸い卵形で他の腹
菌類と見間違えるような形をしているが、成熟す
ると「卵」の殻を破って、緑色の基本体 (グレバ)
をつけた傘状の先端部を持つ長い柄または托が伸
びて直立する面白い形をしたキノコである。

スッポンタケと思われるキノコは、筆者の日常
観察エリアである愛知県名古屋市名東区牧野池公
園でも確認できていたが、子実体、特に幼菌のサ
イズが図鑑などで報告されている記述よりいつも
小型であることが気になっていた。

2020年10月、観察エリアである牧野池公
園で未熟な子実体を見つけたので、寸法に注目し
て、成熟の過程を観察し、記録した。

観察記録

1. 未熟な子実体の観察記録

2020年10月14日に名古屋市内の牧野
池公園にて未熟な子実体を発見した。発見場所は
竹やぶ内の遊歩道沿いで、地上に幼菌が群生して
いた。子実体は白色球形で弾力があり強靱。後日
10月18日に改めて金尺をあてて測った直径は
子実体 A が 25mm、子実体 B が 23mm であった (表
1)。基部には白色の根状菌糸束を持つ。子実体
の断面には透明ゼラチン質の成分のなかに白色の
組織に包まれた釣鐘形状の緑色の組織と、白色の
中心軸形状の柄になる組織が観察された。黄色や
赤色の組織は観察されなかった。

なお、スッポンタケより成菌のサイズが小さな
菌種として、傘や柄に黄色の部分があるキイロス
ッポンタケ、傘や柄に赤色の部分があるキツネノ
エフデが図鑑類で報告されている。今回観察した
キノコの子実体は、断面に黄色や赤色の組織が観
察されなかったことから、これら2種のキノコの
子実体でないことを確認した。

2. 子実体の成長

10月18日から子実体の直径を記録しながら
成長を観察した。



未熟な子実体の断面 10月14日撮影



観察した子実体 右の個体を B、左の個体を A と
して記録した 10月18日撮影

1 1 月 5 日 これまで順調に増えていた直径の成長が 3 cm 前後を頂点に止まった。以後は上下方向にややサイズアップしながら成熟に向かっていったようである。

1 1 月 1 8 日 子実体の外皮が球の側面で裂開し、縦方向に伸長をはじめた。



外皮が裂開して縦方向に伸長を始めた子実体
1 1 月 1 8 日撮影

1 1 月 1 9 日 球形の外皮から傘と柄をもつ托が伸びた。成熟した子実体の全長は 60mm と 110mm。傘は暗緑色の基本体に包まれ、外皮の上半分を上部に帽子のように被ったままであった。サイズの大きいほうの子実体 A を採取して持ち帰り、詳細を観察することにした。



成熟した子実体 1 1 月 1 9 日撮影

幼菌の外皮が裂開し、内部の托が伸張しきって成菌の形状になるまでは、わずか 1 日たらずの速さであった。

1 1 月 2 0 日 托は球形外皮の下半分、つまりツボから容易に外れ、柄の断面が見えた。柄は白色のスポンジ状で小穴がたくさんあり直径が 13mm、中空で壁断面は泡沫状の 3 層程度の組織でできている。傘の上の外皮の上半分を外すと、傘の先端に白色でふちの滑らかな頂孔が現れた。頂孔は傘と外皮の接続部分の跡であることがわかった。傘は柄と一体で強くつながっており長さは 30mm、基本体を洗い流すと傘部分は薄黄色で、白色の柄の間には、はっきり区別があり、表面に深い網目状の隆起がある。



托全体 1 1 月 2 0 日撮影



柄の断面 11月20日撮影

表1 幼菌の直径の推移 (単位:mm)

日付	子実体A	子実体B	(子実体C)	(子実体D)
10/18	25.5	23.0		
10/24	27.0	25.0		
10/28	29.0	25.0		
10/29	29.5	27.0		
10/30	28.0	26.0		
10/31	28.5	27.5	(19.5)	(18.5)
11/3	30.0	30.0	(22.0)	(22.0)
11/4	28.5	27.5	(22.0)	(22.5)
11/5	28.5	27.5	(21.0)	(21.5)
11/6	27.5	26.5	(22.0)	(20.0)
11/9	28.5	27.0	(21.5)	(20.5)
11/13	27.5	25.5	(22.0)	(18.5)
11/17	28.0	25.5	(21.5)	(21.5)
11/18	29.0	24.0		

注記: 観察期間中、雨天の日が、10/17 10/19 10/23 11/2 11/7 の5日あった。期間後半、気候が乾燥してきたので 11/14 11/17 の二回、水やりをして周辺の湿りを保った。

子実体C、Dを10月31日に見つけた。子実体A、Bに比べてサイズが一回り小さく、先端が赤味に色ついてきたので、成熟を期待していたが、残念ながら11月18日に地中に菌糸束を残して消失してしまった。

いくつかの図鑑より抜粋したキノコの大きさに関するデータ

手元の図鑑の記述によると、幼菌の直径と、成菌の全長が分かる。観察と比較のため表2にまとめた。

今回観察したスッポンタケについて

球形の幼菌は徐々に成長し直径を増やすが、熟成直前垂直方向に特に成長するため、周囲方向の成長は止まるようである。最も成長した際の直径をそれぞれ幼菌時の直径としたが、表1のとおり最大でも直径3cmを越えなかった。表2と比べると、幼菌の直径は、これまでに国内外の図鑑で報告されている数値の中でも小さい方の部類であった。

吉見昭一先生は「地下生菌図版集」で幼菌の直径を2.6~4.0 cmと報告しているので、幼菌の直径については更に観察例を増やしてみる必要がありそうだ。

本観察では、発見した幼菌は成熟までに1ヶ月以上を要した。幼菌時の直径と成菌の全長の比は子実体Aでは $110/30=3.7$ 、子実体Bでは $60/30=2.0$ であった。表2と比べると、今回観察したキノコの比は子実体Aではこれまでに報告されている比に比べて大きく、子実体Bではこれまでに報告されている比に比べて小さかった。

成熟した子実体Aで柄の直径は13mmであり、一例として「北陸のキノコ図鑑」に1~1.7cmと

あるのでこれは記載の範囲内であった。これも含め外形の特徴はスッポシタケの記載によく一致した。

まとめ

愛知県名古屋市名東区牧野池公園で、一般的な記載のほぼ下限または少し小さめの直径のスッポ

シタケと思われる幼菌を成熟まで約 1 ヶ月間観察した。

成熟して伸長した托は幼菌の直径との比で主な図鑑の記載の中では上限と下限にあたるサイズだった。そのほかの外観の特徴もスッポシタケの記載とよく一致した。

表2 図鑑に載る幼菌の直径と成菌の全長

図鑑	幼菌の直径 (cm)	成菌の全長 (cm)	比※※
北陸のきのこ図鑑	4～6	9～15	2.3～2.5
原色日本新菌類図鑑(II)	4～6	9～15	2.3～2.5
日本のきのこ	4～6	9～15	2.3～2.5
NATUR BIBLIOTHEK PILZE	3～5	15～20	4～5
WILD FUNGI OF KOREA	4～6	9～15	2.3～2.5
Guide des Champignons		15～20	
地下生菌図版集	2.6～4.0※	約12※	3.0～5.5

※ 312～313頁 図版XI からの実測値

※※ 幼菌の直径と成菌の全長の比

参考文献

- ・池田良幸 (2005) 北陸のきのこ図鑑, 橋本確文堂, 金沢, p. 273
- ・今関六也, 本郷次雄 (1989) 原色日本新菌類図鑑 (II) . 保育社, 東大阪, p. 221
- ・今関六也, 大谷吉雄, 本郷次雄 (1988) 山溪カラー名鑑 日本のきのこ, 山と溪谷社, 東京, pp. 520-521
- ・Thomas Laessle (2006) PILZE, Dorling Kindersley Verlag, München, p. 247
- ・Park Wan-Hee (2007) Wild Fungi of Korea, Kyo-Hak Publishing, Seoul, pp. 418-419
- ・Gerard Chenuet (2007) Guide des Champignons. Libris, Grenoble, p. 265

- ・吉見昭一 (2008) ミクロの世界へ第一歩 地下生菌図版集, 吉見一子, 京都, pp. 311-312

(2020年12月23日受付)

盆栽に生えたきのこ

萩本宏（菌楽者・雑想楽者）

私は、若い頃、盆栽作りを盛んにやった。盆栽と言っても、何万、何十万円もするような大層なものではない。私の勤め先の構内に生えていた幼木を採集したり、野山で種子を拾ってきたりして育てたものである。購入する場合も、錦松と八房性黒松の各一鉢のほかは幼木ばかりで、それも同じ種の品種や系統或いは同属を数種類買ってきた。鉢はどんどん増えていった。灌水、除草、植替え、剪定、花柄摘み、病虫害駆除と労力は増大するし、鉢も数だけでなく、植替えごとにサイズを大きくしなければならなかった。

私は潰しが効かないし、転勤は定年までないだろうと考えて、職場へ徒歩8分ほどのクヌギ林や畑地を造成した小さな新興住宅地に家を建てた。その職場に20年ほど勤めてから大阪、東京、大阪で合計18年間ほど働いた。東京時代の10年間は多忙を極め、家には殆ど帰れなくて、多くの盆栽を枯らした。先を見通せない凡才が盆栽をやって植物に大変な迷惑をかけた。今もなんとか生きているのは、管理が容易なように釉薬のかかった盆栽鉢から一般的な素焼き鉢に植え替えたもので、盆栽と言っても、実際は盆栽崩れの鉢植えの樹木である。

鉢には目的以外の様々な植物（いわゆる雑草）が自然に生える。ネジバナとスミレは、我が家の庭では露地には絶対に生えないのに、鉢には沢山生える。そして、時々だがきのこも生える。私はこれらのきのこを名もなき雑茸などとは言わない。多分、私が知らないだけである。ところが、2010年に、初めて私にも分かるきのこが生えた。それはアカヤマタケであった。

このきのこは、元は盆栽用の平鉢に植わってい

たイロハカエデを標準型8号の素焼き鉢に植えたところに発生した（写真1）。発生に気付いたのは、2010年9月24日であり、子実体はかなり成長していた（写真2）。最盛期の写真は撮りそこなった。10月1日には、5個の子実体（1個は観察のために採取）の傘は扁平に開き、美しい赤橙色は抜けて、周辺部から中心部にかけて黄褐色から黒褐色になり、中央部の尖った部分は黒変した（写真3）。更に、2日には、子実体は3個が崩壊し、2個になった。残ったきのこは、傘全体が黒褐色に変色した（写真4）。

次は、ゴヨウマツに生えたキツネタケの仲間である。このゴヨウマツ（写真5）は、1971年、今から半世紀もの昔に「四国五葉」なる名前の苗木を150円で買って育てたものである。あちこちの枝を枯らしてしまったうえに、枝が伸び放題になって盆栽の体をなしていないが、よく長生きしている。写真5は2010年10月5日に写したゴヨウマツの全体である。なんとも無様で他人に見せられる代物ではないが、隠すわけにはいかない。この鉢にきのこが28個も生えた（写真6）。これだけ沢山生えると、きのこの明るい橙褐色が緑に映えてきれいであった。

次は、ハツタケまたはアカハツである。2013年10月にちょっと違ったきのこが生えだしたと思ったらどんどん成長したが、鉢の隅に、しかも後続のきのここと重なったために、形がいびつになった（写真7）。引き抜いて調べても多分私には分からないから余計な殺生をするだけだと思ってそのままにしておき、十分成長して胞子も飛散し終わったであろうと思われた11月中旬に引き抜いた。ひだに触れたらゆっくり青変した（写真

8)。図鑑を参照しながら調べたらハツタケないしはアカハツに行き着いた。ひだを傷付けた時に出てくる液体の色を記録しておくべきであったが、迂闊にも「青くならない？」で終わってしまった。

五葉松の鉢を浅い角鉢から少し深めの丸鉢に植え替えたが、根には菌糸が纏わりついてほぐすのに苦労した。2019 年の 2 月に丸鉢の土を替えた際にも、菌糸が纏わりついていた（写真 9）。

次は、私は自信がないが、ニセシヨウロ属と思われるきのこの話である。クヌギの種子（堅果、俗に言うどんぐり）は、2015 年の秋に近隣の林で拾ってきたものである。様々な樹種の堅果が落ちていた中で、クヌギの堅果を無意識的に選んだが、今になって考えると、子供の頃のクヌギに対する潜在的な愛着心がその堅果を拾わせたのである。

5 粒のクヌギの堅果を採集してすぐに 1 鉢に植え、翌年の春先に 1 本ずつ鉢に植え替え、更に翌々年、17 年にそのうちの 1 本を書斎の南側に夏の日除けを兼ねて地植えにした。他の 4 本は植木鉢に移植した。鉢は標準型 7 号相当のプラスチック製の鉢に 3 本、10 号の素焼鉢に 1 本植えた。10 号鉢に植えたクヌギの樹高は 1.6m、7 号鉢に植えたものは 1.1~1.5m である。

2017 年の 9 月末、まだ、クヌギは濃い緑色の葉をつけていた（写真 10）。10 号鉢にニセシヨウロ属とおぼしいきのこが生えているのに気づいた（写真 11）。私にとっては、マツ科植物の毬果に生えるきのこ以外のきのこは対象外なので、きのこに気づいたときは、発生から何日か経っていた。写真 11 のきのこは、ほぼ成長を終えたところのようで、10 月 17 日には胞子を放出する直前のものであった（写真 12）。10 月 25 日には胞子が飛び出してしまったのか、きのこはひしゃげて扁平になっていた（写真 13）。

このきのこは、2018 年には発生しなかったのですが、一過性かと思っていたが、2019 年 11 月 4 日に、

次に記述するヒメワカフサタケと同時に発生しているのを見た（写真 14）。ニセシヨウロ属のきのこはヒメワカフサタケに圧倒されて見づらいなので、それが生えている部分を拡大した写真を掲げた（写真 15）。

次はそのヒメワカフサタケの話である。ニセシヨウロ属のきのこが生えた鉢に、私の知らないきのこが 2 個生えているのを 2017 年 11 月 6 日に気づいた。きのこの大きさは 10 円硬貨くらいであった（写真 16）。このきのこは小寺祐三氏にヒメワカフサタケと同定していただいた。このきのこは、見つけた 4 日後、11 月 10 日には傘を完全に開いた。2 個のうちの 1 個は傘に深い亀裂が入っていた。亀裂の入った 1 個を残して、他の 1 個を抜き取った（写真 17）。この頃、クヌギの葉は黄ばんできた（写真 18）。残したきのこは 11 月 21 日になっても、老化は進んだものの原型をとどめていた（写真 19）。その側で幼菌 1 個が発生しているのを見つけた。他方、クヌギの葉の黄化が一段と進み、下部の葉は枯れてきた（写真 20）。また、同日、7 号鉢の一つに 8 個のヒメワカフサタケが生えているのを見た（写真 21）。

2018 年には 10 月 23 日に昨年と同じ 10 号鉢にヒメワカフサタケの幼菌 2 個と開傘したものが発生しているのに気づいた（写真 22）。10 月 26 日には幼菌は開傘し、成菌の傘はそっくり返っていた（写真 23）。その後、きのこは相次いで崩壊した。11 月 1 日には幼菌が 2 か所に 1 個ずつと 1 か所に重なって 3 個、合計 5 個が発生し（写真はない）、11 月 7 日には単独で生えた 2 個と重なって生えた 3 個はすべて傘を開いた（写真 24）。この頃、クヌギの葉はすべて黄変した。そっくり返ったきのこは老化が進んでいた（写真 25）。この後の経過についての写真はないが、24 日には、写真 25 の 5 個の老化したきのこが萎びた一方で 3 個の幼菌が発生していた。この幼菌は 12 月 2 日には、開傘していた。24 日にあった萎びたきのこは残骸になっていた。幼菌 3 個は、写真は掲載していないが、そ

の後、成長して 12 月 8 日に傘がややそり返っていた。前記の残骸はそのまま残っていた。他方、幼菌 1 個があったが、その末は記録していない。

11 月と 12 月はマツカサキノコモドキとニセマツカサシメジの発生最盛期であるので、ヒメワカフサタケの観察は 2018 年で終わりにしたかったが、2019 年 11 月 4 日にはニセショウロ属のきのこ 2 個とともに、成菌 7 個が盛大に生え、そのうえ、幼菌も 8 個発生していることに気づいたので、観察を続けることにした（写真 26）。2019 年 11 月 4 日には成菌が 7 個、幼菌が 8 個生えてきた（写真 26）。成菌は 3 個の傘が既にそっくり返っていた。幼菌は分かり易いように 5 個と 3 個に分けて拡大撮影した（写真 27、28）。成菌は引き抜いてひだと柄の状態が分かり易いように撮影に供した（写真 29、30）。

写真 17 の場合と同様に、ひだの一部には、それを覆う膜状のものがあつた。柄の地下部には菌糸が密生し、植物の細根が混じっていたが、その細根と菌糸の関りを示唆するものは観察できなかった。11 月 8 日には、他の 7 号鉢 1 鉢にヒメワカフサタケが 1 個生えていることに気づいた（写真はない）。

2020 年には、ヒメワカフサタケは、クヌギがまだ新葉を展開していない 4 月 8 日と葉が完全に枯れた 12 月 1 日に 10 号鉢に 2 個ずつ生えた。秋に発生したものは、老化しながらも年を越した。ヒメワカフサタケはクヌギと共生関係にあるのかどうか大変気になる。鉢植えのクヌギは、既に植え替えの時期にきているので、その際、根を観察する心算である。なお、庭に地植えした 1 本のクヌギは、2020 年末に高さ約 3.5m、根元の直径 6 cm 弱、1.5m 高の直径約 4 cm に達したが、この木の周辺には、現在まできのこは何も生えてこない。

私は松毬に生えるきのこのお遊び研究の片手間で、盆栽に生えるきのこを楽しんだが、『かわいいきのこ（うつろあきこの、保坂健太郎監修、イースト・プレス、2018）に「友人のうちのユーカリのブ

ランターに黄色いきのこが生えてきました。よくわからないけど突然はえてきたの。黄色いきのこの正体はコガネキヌカラカサタケ。こうして植木鉢などから顔を出すのはわりとよくあることらしい。びっくりしたけど、かわいいからこのままにしておこうかなつて」と樹木の鉢植えにきのこが生えたことを話題にしていた（句読点は、分かり易くするために私がつけた）。

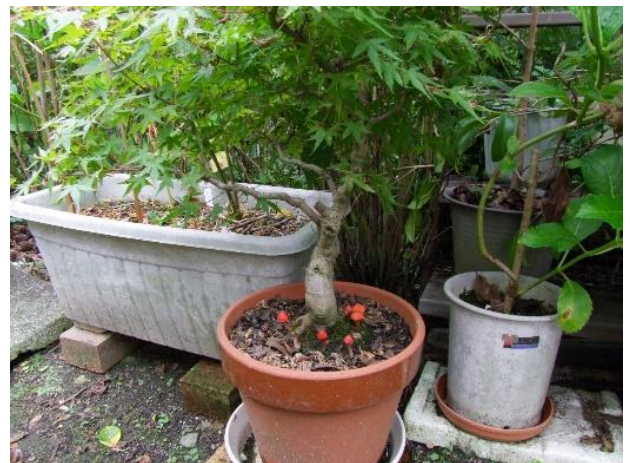
私は菌学者ではなくて、菌楽者である。菌類を楽しめればそれでよい。記録をとったり、写真を撮ったりするのはすべて自分のための消費活動である。ところがせっかく観察したのだから会誌に投稿させていただこうかなどという邪心を起こして纏めだすと、あれもない、これも足らないとなって後悔することになる。この寄稿もそのたぐいである。

謝辞

クヌギの鉢に生えたきのこをヒメワカフサタケと同定して下さった小寺祐三氏に厚く御礼申し上げます。

写真の説明

1 アカヤマタケが生えたイロハカエデの鉢（2010/9/24 撮影）



カエデ類の鉢も園芸品種を含めて 20 種類ほどあつたが、今、残っているのは野生種の 5 鉢だけで、いずれも発芽直後の実生から育てた。この写

真の時点で約 40 年経っている。枝の折れた跡が残っているが、これは屋根から落ちてきた冰雪による被害跡である。元は長方形の浅い盆栽鉢に植えていて、秋には見事に紅葉したが、管理しきれなくなり、標準型 8 号素焼き鉢に移した。その際、通気と保湿を目的に培土に腐葉土を多めに混ぜた。この腐葉土がアカヤマタケの成長に役立ったのではないかと思う。

2 全盛期直前のアカヤマタケ (2010/9/25 撮影)



花であれば 8～9 分咲きといったところであろうか。アカヤマタケは腐生菌と教わったが、イロハカエデの根元を取り巻くように生えていて、まるで菌根菌が描くフェアリーリングのようであった。

3 老化したアカヤマタケ (2010/10/1 撮影)



前回の写真から 1 週間も空けてしまったために、

完全な成蕈を写せなかったのは残念である。きのこ全体が褐変し、傘の中央部が黒ずんでいる。きのこが 5 個しかないのは、観察のために最も手前にあった 1 個を引き抜いたからである。

4 黒変し、崩壊するアカヤマタケ (2010/10/3 撮影)



5 個のきのこのうち 3 個は朽ちて崩壊、残った 2 個は全体が黒褐色になった。「茸の色は移りにけりないたずらにわが身世にふるながめせしまに」

5 ゴヨウマツ (2010/10/5 撮影)



1971 年に 150 円で買って育てた「四国五葉」なるゴヨウマツである。ほぼ同じ時期に買った高価な錦松や八房黒松は枯らしてしまったが、これはろくに手入れされずに長生きした。きのこのお蔭ではないかと想像している。かつてはそれなりの形をしていたが、何度か枝が折れ、手入れも不行

き届きで盆栽の体をなしていない。次の写真だけにしておきたかったが、それではゴヨウマツの証拠にならない。この時は、浅底の角鉢に植えていたが、今は土の量が多い丸鉢に植えてある。

6 ゴヨウマツの鉢に生えたキツネタケ類
(2010/10/4 撮影)



地面には28個のきのこ、苔類、巻貝が、木には地衣類が着いている。近所のおばさんがこれを見て「これはマツタケじゃないのですか?」、私「マツタケならこんなぼろ家には住んでいませんよ!」

7 ゴヨウマツの鉢に発生したハツタケ（アカハツ?）
(2013/11/16 撮影)



この年は、キツネタケの類は1個しか生えず、10月中旬から私には分からないきのこが鉢の隅から生えてきた。そのままにしていたら、2個目が先に生えた大きなきのこの右側に接して生えてきた。

これはハツタケかアカハツらしいと推察したが、分類に詳しい方に同定を乞うて赤恥のリスクを減らすべきであった。

8 青黒く変色したハツタケ（アカハツ?）のひだ
(2013/11/27 撮影)



きのこが萎れてきたので引き抜いたが、写真の撮影を忘れた。この写真は引き抜いてからしばらくして撮影したものである。

9 ゴヨウマツを植え替えた際の根の状態
(2019/2/14 撮影)



2014年の冬に角鉢から丸鉢に植え替えた際にも、根は菌糸でびっしり固められていたので、根の固まりをほぐして植え替えたが、今回の植え替え時にも同じような状態であった。ゴヨウマツの葉はハツタケに搾り取られたためか緑があせていた。

ハツタケかアカハツの菌糸であれば、また生え

てきてもよさそうだが生えない。菌糸も栄養不良なのであろう。

10 クヌギの幼木 (2017/9/29 撮影)



2015 年の秋に拾った種子を植えたものである。私の子供の頃は、クヌギは重要な薪炭材であり、櫨木材であり、きのこの木であり、昆虫の木であった。1941 年 12 月 8 日、開戦の日、快晴の午後、祖父がクヌギの薪割りをしていたら、大きなノコギリクワガタが出てきた。今時「櫨(くぬぎ)」といったら喫茶店と勘違いされかねない。

11 クヌギの鉢のニセシヨウロ属のきのこ (2017/9/29 撮影)



発生に気づいてすぐの写真であるが、成長が最高に達した状態のようであった。クヌギと関係があるのかどうかは分からない。

12 胞子の放出が近いニセシヨウロ属のきのこ (2017/10/17 撮影)



胞子が出そうな感じがしたが、いつ出るのかわからなかった。

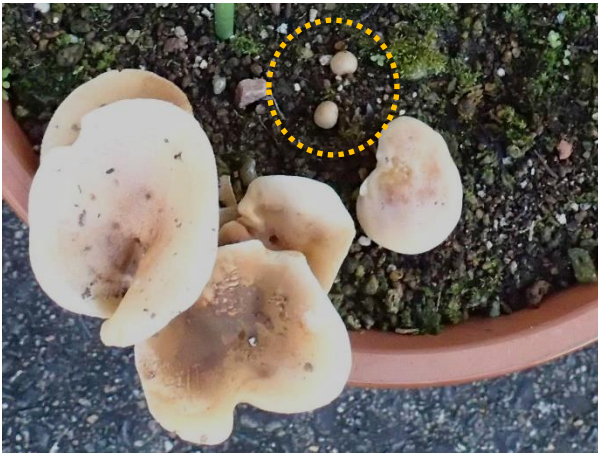
13 胞子が出た後のニセシヨウロ属のきのこ (2017/10/25 撮影)



胞子は 10 月 17 日から 25 日の間に放出されたのであるが、いつ放出されたかは、毎日見ていなかったなので分からない。きのこはひしゃげて扁平になった。

3 個のきのこのうちの 1 個は極端に小さいが、生育熟度に差はなかったようで、ほぼ 同時期に胞子を飛ばしたようである。

14 ニセシヨウロ属のきのことヒメワカフサタケ
の同居 (2019/11/4 撮影)



2019年には、前年に姿を見せなかったニセシヨウロ属のきのこがヒメワカフサタケと一緒に姿を現した。それは傘が開ききったヒメワカフサタケに囲まれるようにして2個生えていた。大きさが違いすぎるので石粒と間違えそうである。

15 ニセシヨウロ属のきのこと10円硬貨
(2019/11/4 撮影)



写真14のニセシヨウロ属のきのこの拡大写真であるが、10円硬貨よりもはるかに小さい。

16 発生初期のヒメワカフサタケ
(2017/11/6 撮影)



この年に初めてヒメワカフサタケの発生を知った。実は、何が生えたのか分からなかったが、小寺祐三氏に同定していただいた。幼菌はなんともグロテスクな形をしている。なぜもっと均整のとれた形で出てこないのか。

17 開傘したヒメワカフサタケ (2017/11/10 撮影)



11月6日に10円硬貨くらいの大きさだったきのこは(写真16)、4日後には傘を完全に開いた。2個のうちの1個の傘には大きな亀裂が入った。きのこ1個を引き抜いて、傘の裏を撮影した。傘の裏、ひだを覆う膜状のものは、胞子からの発芽菌糸、それとも脱分化菌糸あるいは他種の菌糸、その他のものか？

18 クヌギの葉の黄化の始まり
(2017/11/10 撮影)



19 老化のすすんだヒメワカフサタケとその幼菌
(2017/11/21 撮影)



写真 17 のヒメワカフサタケは老化が進み、崩壊の一手手前の感じである。右のチョコレート菓子のようなものが幼菌であるが、きのこの色はきのこが成長するにつれて色素が希釈されるためか、薄くなる。幼菌の形はやはりいびつである。幼菌が地中で成長する際に、礫などの障害物を自分の姿、形に残していたのかと雑想する。土壌表面から深さ 3 cm 程度を、できるだけ均一な大きさの細粒の土壌にすれば形はまともになるのだろうか？

20 黄化したクヌギの状態 (2017/11/21 撮影)



下部の葉は黄褐色になり、先端部の葉は少し緑が残るもののほぼ黄化した。この時期のクヌギの黄葉は美しいが、枯れても離層が形成されないので、みすばらしい。我が家では鉢植えのクヌギの葉は年末にすべてむしり取る。

21 クヌギ鉢 (7 号鉢) に生えたヒメワカフサタケ
(2017/11/21 撮影)



クヌギとヒメワカフサタケは関係がありそうである。このきのこは、我が家ではクヌギ鉢の中にしか生えない。鉢の中の雑草の成長を防ぐために古くなった葦簀の葦を切り刻んで鉢の表面全体を覆っていたが、きのこのために取り除いた。この鉢のきのこの傘は写真 14 のきのこに比べて丸い。

22 開傘したヒメワカフサタケとその幼菌
(2018/10/23 撮影, この日は小雨)



23 写真 22 のヒメワカフサタケの 3 日後の様子
(2018/10/26 撮影)



24 ヒメワカフサタケの開傘の様子
(2018 年 11 月 7 日撮影)



11 月 1 日に単独で 2 個、1 か所に重なって 3 個発生した幼菌 (写真はない) がすべて傘を開いた。

25 写真 24 のヒメワカフサタケの成熟、老化
(2018/11/7 撮影)



傘はすべてそり返り、傘の縁やひだが褐変し始めた。

26 多数のヒメワカフサタケの発生
(2019/11/4 撮影)



2019 年 11 月 4 日に傘がややいびつな成菌 7 個と幼菌 8 個が生えていた。ここでも幼菌はいささか異形である。成菌も幼菌時の異形の反映か、円形が崩れている。緑色の支柱の根元にはニセショウロ属のきのこが 2 個見える (写真 14 参照)。

27 幼菌（5 個）の拡大写真 1（2019/11/4 撮影）



5 つ目の幼菌は、10 円硬貨の斜め下の最大の幼菌の右上に接して発生している。このきのこは互いに接して発生するから形がいびつになるのか？

きのこどうしが接するのは、胞子の飛散にマイナスと思うが、なぜ接して発生するのか？マツカサキノコとマツカサキノコモドキは地下に潜って互いに離れようとするのに・・・。

28 幼菌（3 個）の拡大写真 2（2019/11/4 撮影）



下の幼菌の左側に土中から出でくる幼菌が見える。この写真の幼菌も形がいびつである。幼菌の形を見ていると、他のきのこに接しなくてもいびつになるようである。このきのこの形を見ていると、地下に潜り込みたいのではないかとさえ思えてくる。

29 ヒメワカフサタケの傘の表面と裏面（ひだ）の様子（2019/11/4 撮影）



今までに発生したヒメワカフサタケの平均的な大きさである。写真 17 のきのこと同様に、ひだの一部分が薄膜で覆われたようになっている。傘の形がいびつなのは、幼菌時代の成長時の障害物と成長時のきのこどうしの押し合いによるものだろうか。

30 ヒメワカフサタケの斜め下から見た様子（2019/11/4 撮影）



柄の下端は土中にあり、菌糸が土壌を抱え込むようにして柄の起立を支えているようであった。柄は中空で脆かった。

（2021 年 1 月 5 日受付）

ヨーロッパのきのこ図鑑の紹介 (2) 多孔菌類専門図鑑

佐野書店 佐野悦三

始めに：

第2回目は、いわゆるサルノコシカケの仲間、硬質菌とか多孔菌類と呼ばれるきのこの仲間の図鑑を紹介します。

国内の図鑑：

専門図鑑として約 200 種類を生態写真と顕微鏡図で解説する城川四郎著、神奈川キノコの会編（1996）「猿の腰掛け類きのこ図鑑」地球社、がありました。ずいぶん前に絶版になりましたが、今でも本書を探される方がいます。しかし、207 ページほどの本ですが、古書市場では何万円という値段が付いており、ちょっと手が出せません。

もっとも、今回紹介するヨーロッパの専門図鑑の価格も数万円の単位で高価です。しかし、掲載種数や内容は段違いの充実度ですからご容赦願います。

現在、国内では初版が 1986 年に出版された「原色日本新菌類図鑑 (II)」に頼るしかなさそうですが、掲載種数が少ないうえに、これもまた絶版になり、古書か、たまに復刻されるオンデマンド版を入手するしかありません。

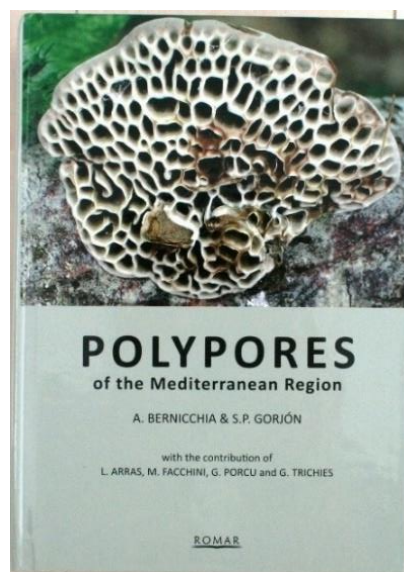
本当に残念なことですが、国内で日本語の図鑑を用いて多孔菌類を調べることは絶望的な状況です。

ヨーロッパの図鑑：

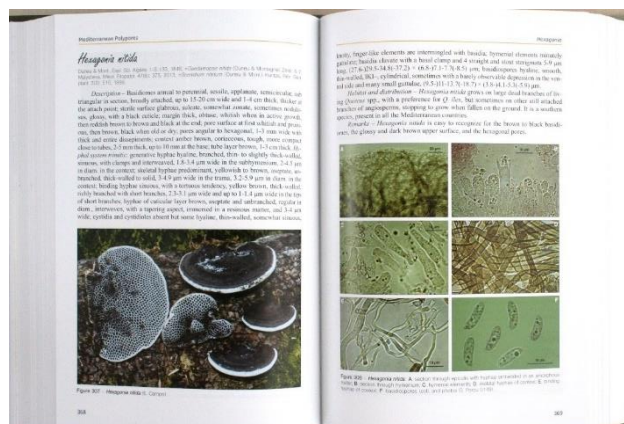
目をヨーロッパに向けると、さすが博物学の伝統のある地域です。日本とは全く違う光景が見えてきます。

昨年には、千ページ近い専門図鑑が 2 点も出版されました。

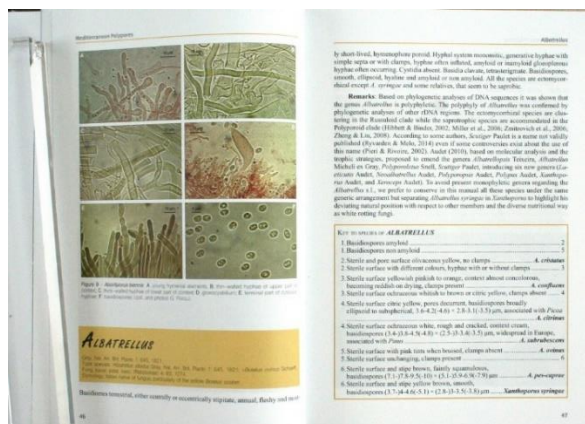
(1) Annarosa Bernicchia & Sergio Pérez Gorjón
(2020) 「Polypores of the Mediterranean Region」(地中海地域の多孔菌類)



本書は、904 ページもある大冊の専門図鑑です。116 属 435 種を最新の情報をもとに、原色生態写真や顕微鏡写真で詳細に解説します。タイトルは、地中海地域と限っていますが、後に紹介するヨーロッパ全体をカバーするという二つの多孔菌類専門図鑑がそれぞれ、416 種、400 種を載せていることから 435 種を載せる本書もほぼヨーロッパ全域をカバーしているといつてよいと思います。



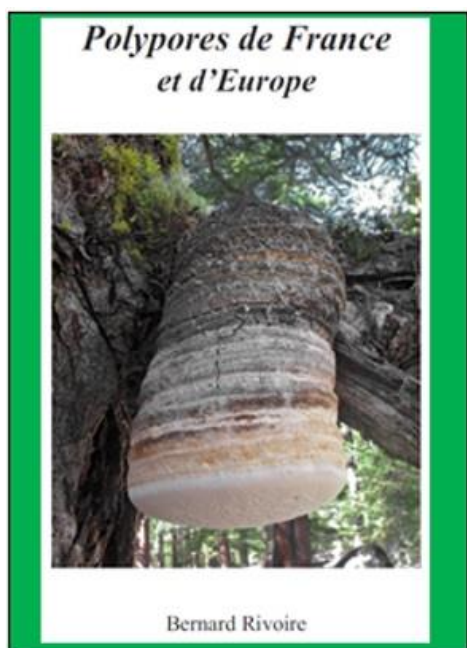
画像を見ていただければわかるように、生態写真に加え、顕微鏡写真や図が付いています。もちろん検索表も付いています。



第一著者の Annarosa Bernicchia (アンナローサ・ベルニッキア) 先生は、イタリア、ポーロニャ大学の研究者で多孔菌類に関するたくさんの論文や著書があります。

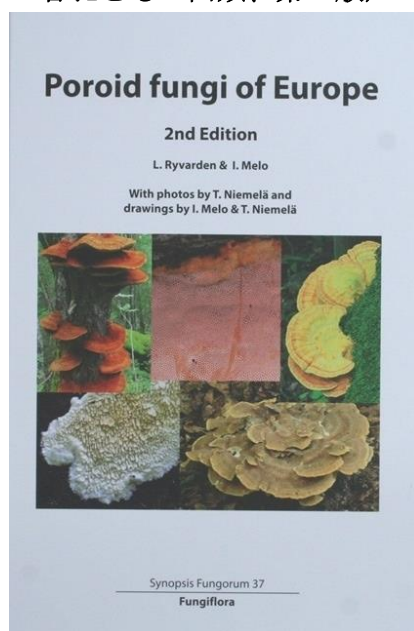
中でもイタリアで出版が続けられている Fungi Europaei (ヨーロッパの菌類) シリーズの第10巻「Polyporaceae s.l.」(広義の多孔菌科)と第12巻「Corticiciaceae s.l.」(広義のコウヤクタケ科)の著者として知られています。

(2) Bernard Rivoire (2020) 「Polypores de France et d'Europe」(フランスとヨーロッパの多孔菌類)

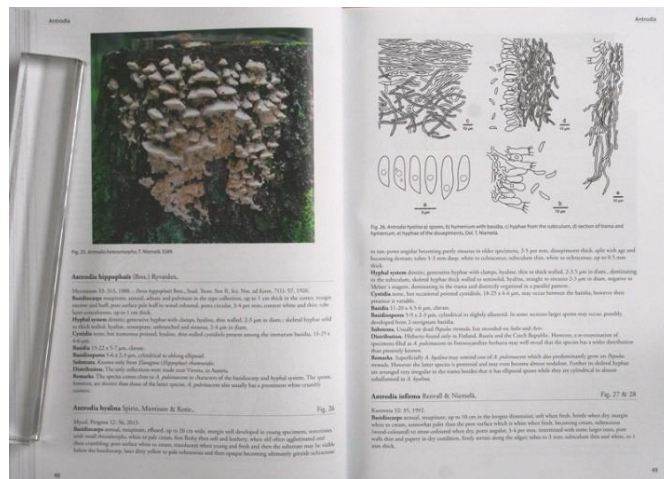


874 ページもある本書は、昨年12月に出版されたばかりです。著者の40年に及ぶ多孔菌類研究の集大成として出版されました。ヨーロッパで記録された多孔菌類のすべて122属416種を記載・図示する専門図鑑です。本書がフランス語で書かれていることもあり、佐野書店ではご紹介するだけに留めました。もちろんご希望があればお取り寄せします。

(3) Leif Ryvarden & Ireneia Melo (2017) 「Poroid fungi of Europe 2nd Edition」(ヨーロッパの管孔をもつ菌類、第2版)



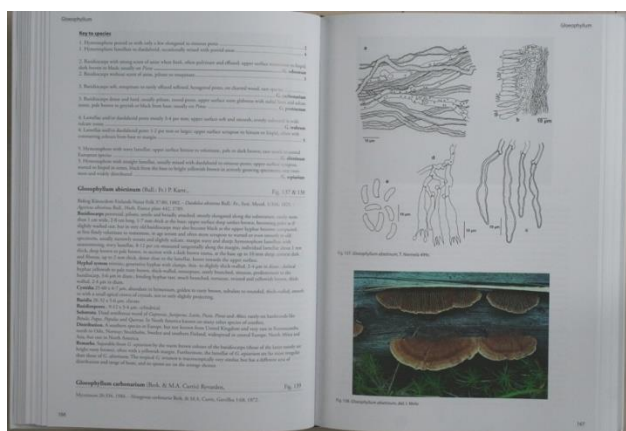
本書は、多孔菌類研究の大家、ノルウェー、オスロ大学の Ryvarden (リバルデン) 教授とポルトガル、リスボンの国立自然史博物館・植物園の研究者 Melo (メロ) 先生との共著です。



ほぼ A4 サイズの大判で 431 ページあります。ヨーロッパに産する多孔菌類 400 種を生態写真、顕微鏡図を付け解説します。

顕微鏡的特徴で分類するという Ryvarden 先生の考えから、これまでに出版されたたくさんの著書には白黒の顕微鏡図しか載っていませんでした。もちろんそれは正論ですが、肉眼で見た特徴重視のわたしたちアマチュアにとっては先生の著書は大変使いにくいものでした。

それが何ということでしょう！先生は本書で大変身したのです。



画像をご覧になればわかるように本書には顕微鏡図に加え原色の生態写真が付いています。これなら顕微鏡を持たないわたしたちも使うことができます。

生態写真をつけることは、表紙や謝辞に書かれているようにフィンランド、ヘルシンキ大学の Niemela (ニーメラ) 教授や既述の「Polypores of the Mediterranean Region」の第一著者、Bernicchia 先生たちがたくさんの写真を提供することで可能になったようです。

Bernicchia 先生は、本書を高く評価しています。もっとも、本書が遺伝子分析の成果を反映していないというコメントもつけていますが。

最後に：

“国内の図鑑”の項で述べたように、日本語で書かれた多孔菌類を調べることのできる専門図鑑は、“ない”といっている状況です。

ではわたしたちは多孔菌類を調べるにはどうしたらよいのでしょうか？

身近に専門家がいれば、その方にお聞きすることが一番です。いない場合はどうしたらよいのでしょうか？

まずは、今回ご紹介した専門図鑑、なかでも最新の研究結果を反映した(1)「Polypores of the Mediterranean Region」(地中海地域の多孔菌類)を入手し、ご自分で調べることでしょう。

しかし、ヨーロッパと日本では、形が似ていても遺伝的に違う種ではないのだろうか？という疑問がわくこともあるでしょう。確かに菌根菌の場合、形では区別できない別種であることも少なくないと思います。が、多孔菌類の場合はどうでしょうか？またマツタケのようにガチガチの菌根菌であってもヨーロッパ産と日本産が同種ということもあります。

アジアに目を向けてみると、中国では菌類の分類研究が盛んになっているようです。中国により多孔菌類専門図鑑があるかもしれません。調べてみたいと思います。

付記：

今回紹介した専門図鑑の価格や在庫状況、もっと詳しい内容などをお知りになりたい方は、「Google」や「Yahoo」といった検索エンジンで「佐野書店ブログ」をキーワードにして検索してみてください。

(2020年12月23日受付)

きのこの和名にまつわる昔話 ～ハツタケやアイタケなど～

萩本宏（菌楽者・雑想楽者）

私は、「盆栽に生えたきのこ」（関西菌類談話会会報 No. 43, 2021）の中で、ゴヨウマツの盆栽にハツタケかアカハツか分らないが、いずれかが生えた話を紹介した。このハツタケかアカハツの発生から、65 年も昔のことだが、ハツタケについてちょっとした言い争いを思い出した。これは私ごとだが、和名にまつわる混乱の典型的な例なので、紹介させていただく。あわせて、他のきのこの和名や関連した出来事についても触れさせていた

だく。

私は、1956 年の晩秋に友人、後の植物病理学者の S 君に奈良に行こうと誘われた。私は、父が傷痍軍人京都療養所（現国立病院機構南京都病院）を設計し、施工を監督していた関係で 1938 年秋から翌年の 6 月頃、3 歳から 4 歳にかけて、奈良市に近い京都府綴喜郡青谷村中（現在の城陽市青谷）に住んでいた。ここで、シイタケの榎木栽培を初めて見た。

4 歳になったばかりの冬、父に連れられて初めて奈良に行った。私は鹿の糞を黒豆と間違えて拾い集めたこと（戦後の話だが、奈良で鹿の糞を集めた菌学者がいたそうだと、博物館で見た崩壊した鉄剣と大きな石棺しか記憶に残っていなかった。さらに、敗戦の翌年、春に国民学校の修学遠足（戦前は伊勢神宮への 1 泊旅行だった）として奈良に行った。しかし、鹿を見た記憶がない。覚えているのは、貴重な夏蜜柑が肩から下ろしたリュックサックから飛び出して若草山を転げ落ちていった情景だけである。

奈良はこの遠足以来の久しぶりだったうえに、実験の日々の息抜きもかねて彼の誘いに応じた。もとは三人で行くはずであったが、F 君が急用で来られなかった。近鉄奈良駅には、女子高等師範学校出身の先生のような女性が待っていた。S 君

が案内を頼んでおいてくれた。ここでは Y 氏にしておく。快晴で絶好の散策日であった。しかし、日本はまだ貧しく、登大路には乳飲み子を抱いた女性が筵に座って物乞いしていた。

私は、何処をどう案内されたのかも、その際の会話も殆ど記憶がないなかで、確かな記憶が三つだけある。新薬師寺の十二神将像と奈良女子大学の本館（当時は講堂、現在は大学記念館）とハツタケについての小論争である。昼食は Y 氏も含めて割勘だったし、Y 氏への土産の品も持参しなかったことが後で気になったが、まったくお粗末な事であった。

十二神将像には大変感銘をうけたが、この日は、大阪の梅田コマ劇場（現在の梅田芸術劇場）が開場した 4、5 日後であったことから、寺の案内人の女性は、舞台を回転させるという発想が、この十二神将の円陣配置にあるような説明をしたのであ

きれた。フェアリーリングからの発想と言ってくれば面白かったのにと思ったが、それは無理な話であった。

奈良女子大学の講堂と校舎の配置は、関西菌類談話会の総会と講演会で毎年お世話になっている龍谷大学大宮キャンパスのそれとよく似ていた。そして、講堂は、現在、共に国の重要文化財であるが、龍大のそれは擬洋風建築で、和洋折衷とはいえ、重厚で寺院の雰囲気さえ感じられるのに対して、32 年後の建設になる女子大学のそれは、瀟洒で軽快な西洋建築である。

三つ目のハツタケについての言い争いは、Y 氏とのちょっとしたやりとりである。Y 氏が私の専攻を聞いたので、S 君が「きのこの研究」と私の代わりに返事した。私は、「微生物に関わる研究をしたい」という理由だけで大学に入って、きのこの研究の真似事をしていたが、「日本農業の為に」と

声高に叫んでいる学生をみると、気が引けると同時に何とも疎ましかった。食料不足の時代に「きのこの研究？」と怪訝な顔をされることがままあった。だから返事はしたくなかったが、友人に代返されては仕方がない。

Y氏は、すかさず「アイタケを知っていますか。傷をつけると色が変わる・・・」と訊ねてきた。「それはアイタケではありません。ハツタケです。アイタケは別にあります」と返事した。その後の会話の内容は覚えていないが、最後に、Y氏は「私のところ（鳥取県だったか島根県だったか？）ではアイタケと言うのです」と語気を強めて会話を打ち切った。一寸気分が悪くなったが、これで機嫌をそこねては、観光が台無しなのでおとなしく引き下がった。知ったかぶりをして余計な事を言わないで「知っています」で済ませばよかったのである。

S君もY氏の会話の打ち切り方に驚いたのか、Y氏を「あいたけさん」にしてしまった。四手井淑子氏は憎らしい女の子に「毒きのこ」という綽名をつけた人がいると書いており（『きのこ手帳』四手井綱英・四手井淑子 ナカニシヤ出版、1973）、さらにアイタケは「派手な緑色の傘がひび割れていて、毒々しい感じもするきのこである」と書いている（『キノコ手帖』四手井淑子 平凡社、1997）。四手井氏に倣えば「毒あいたけ」である。「あいたけ」という姓は実在しそうだと思っていたが、最近になって「四十竹」と書いて「あいたけ」と読む姓があるのを知った。残念なことに「四十茸」はなさそうである。それに、アラサーならまだしもアラフォーはY氏にはちょっと気の毒である。ハツタケ（写真1、2）とアカハツ（写真3、4）、アイタケは、この原稿の粗筋が固まる以前には、きのこ展で見たことはあるが、自然に生えているものは、我が家のゴウマツの盆栽鉢（ミニ自然？）の中に生えたハツタケ（アカハツ？）を除いて、一度も見えていない。両種はよく行く京都御苑内にも生えるそうだが、

御苑に行くときは、松毬に生えるきのこしか眼中にないから、生えていても見えなくて当然である。このような状況で、この原稿を寄稿するのはなんとも横着な気がして、7月から急遽、ハツタケとアイタケを探し始めた。



写真1 ハツタケ（第25回きのこ展、2016/10/29撮影）



写真2 ハツタケ（第26回きのこ展、2017/10/28撮影）



写真3 アカハツ（第21回きのこ展、2012/10/27撮影）



写真4 アカハツ (第26回きのこ展、2017/10/28撮影)

泥縄式では無理だろうと思いつながら、雨がしばらくやんだ間に京都市左京区一乗寺地区にある林に出掛けて老蕈1個を見つけ、その後、4回行って、その都度、アイタケらしいきのこを少しずつ離れた場所で1個ずつ見つけた(写真5、6、7、8、9)。しかし、写真6のきのこは、アイタケではなく、カワリハツのように見える。また、写真8、9のきのこは、緑色が強いことやアイタケに特徴的なかすり模様が明瞭でないことから、カワリハツあるいは、私は見たことがないが、クサイロハツを意識している。このきのこの成長の過程を観察する心算で意気込んでいたが、3回目と4回目に見つけたきのこは、翌日には地際で折り取られていた。その折られた柄の断面には蟻が群れていた(写真10)。



写真5 初老蕈のアイタケ (2020/7/12撮影)



写真6 アイタケ? (カワリハツではないか?) (2020/7/21撮影)



写真7 開傘後間もないアイタケ (2020/7/23撮影)



写真8 アイタケ? (カワリハツかクサイロハツ?)の幼菌 (2020/7/24撮影)



写真9 写真8の成菌 (2020/7/25 撮影)



写真10 折り取られた写真7のきのこのこの残渣に群れる蟻 (2020/7/24 撮影)

他方、ハツタケは、京都府の準絶滅危惧種であるが、私にとっては準観察危惧種である。四手井淑子氏は自宅の庭の松の木の下にハツタケが、梅木の下にシメジモドキが出ると書いているが

(『キノコ手帖』四手井淑子 平凡社、1997)、京都では、野生のきのこは、マツタケとホンシメジ以外は見向きもされなかった。昔は、京都三山の山麓はクヌギやコナラなどの雑木林で、甲虫採集の絶好の場であったが、中腹より上はアカマツ林で、尾根筋のアカマツの赤い樹肌が遠方からもよく見えた。京都を描いた日本画の松は殆どがアカマツである。だからマツタケが沢山採れた。多分、ハツタケは平地でも沢山発生したのだろう

が、私は目にすることはなかった。いや、目にしている気づかなかっただけだろう。

京都では、名苑や特別に松を大切にしているお宅の松以外は、アカマツもクロマツも殆どマツノザイセンチュウの被害で枯れてしまった。若い松が育ってきているが、それもマツノザイセンチュウに侵されている。この状況では、ハツタケ探しは容易でなかろうと案じた。しかし、佐野修治氏の知り合いのお宅の庭のアカマツの根本近くに発生したハツタケを観察させていただくなどの特訓のお蔭で、左京区の宝ヶ池公園でなんとか1個だけ見つけることができた(写真11、12、14、15)。また、アカハツも同所で小さいながらも1個見つけた(写真13、14、15)。



写真11 ハツタケ (2020/10/25 撮影)



写真12 ハツタケ (2020/10/25 撮影)



写真 13 アカハツ (2020/10/25 撮影)



写真 14 ハツタケ(左)とアカハツ(右)
(2020/10/25 撮影)



写真 15 ハツタケ(左)とアカハツ(右)
(2020/10/25 撮影)

無論、ハツタケはその場で写真に撮ったが、子実体の背が低くて、ひだの写真が思い通りに撮れなかった。準絶滅危惧種のハツタケを引き抜いてよいものかどうかしばらく思案したが、その子実体は傘が十分に開き、ひだは部分的に青変していたので、胞子をしっかりと飛散させたいだろうと手前勝手な推察をして、抜き取り、ひだや柄の写真を撮影した後に自宅に持ち帰った。ちなみに、「きのこじき」(京都大学菌類同好会)のホームページ(kinokojiki.wordpress.com)に、同じく宝ヶ池地区で採集されたハツタケとアカハツのきれいな比較写真が掲載されている。



写真 16 強烈な濃紺のハツタケもしくはアカハツ
(2020/10/19 撮影)



写真 17 強烈な濃紺のハツタケもしくはアカハツ、傘の裏側とひだ (2020/10/19 撮影)

なお、アイタケが毒々しい色というのであれば、ハツタケやアカハツも変色すると毒々しい。ハツタケかアカハツの崩壊したものを、右京区御室地区の樹齢 20~30 年の若いアカマツのそばで見つけたが、こちらは強烈的な濃紺で、まさにアイタケに相応しい色合いであった(写真 16、17)。

しかし、無意識のうちに食用としてのきのこを思い浮かべることや、崩壊途上のグロテスクな形から受ける印象が毒々しいのであって、色そのものは衣類や陶磁器、万年筆のインクなど身の回りの品にごく普通に使われている。

結局、アイタケとハツタケを野外で見たことのない菌楽者がいきなり、それも短期間に探し出そうというのは、やはり横着な試みのようであった。図鑑を参照すると言っても、図鑑の写真は、その種の典型的な形と色の子実体を、図鑑に最適な成長段階で、熟練の撮り手が撮ったものの中の選りすぐりの 1 枚が使われているのだから、図鑑の通りというわけにはいかない。類似種がある場合はなおさらである。

濱田稔先生の遺品として濱田家から贈られた書籍で、濱田先生の門下生の多くの指紋が残っていると思われる『原色版日本菌類図説』(川村清一、大地書院、1929)の図 No. 5 にアイタケの説明がある。私の Y 氏への返答は、この図鑑から得た知識であった。この図鑑には、(和名) **あゐたけ** (食)、

(学名) *Russula virescens* (Schaeff.) Fr. (図鑑では学名はローマン体、命名者がイタリック体、和名が平仮名の太字で表記されている)とあり、

「蓋は表面常に緑色を呈す。其の緑色なる表皮は往々細かに裂けて散在す。其肉脆弱純白なり。夏季多く山林に生ず。採りて食用に供す。**あをはつ・あゐよへいじ・あをじ**等の方言あり。又は**はつだけ**を**あゐたけ**と呼称する中国地方にては、本菌を**ばなつあゐたけ**と云ひて、**はつだけ**なる**あゐたけ**と区別せり。本図の標本は昭和三年七月二十六日千葉県松戸町附近にて採れり。」の説明とともに、アイタケの実物大の彩色図が載っている。

他方、図 No. 54 には、(和名) **はつたけ** (食)、(異名) **あゐたけ** (中国地方)、(学名)

Lactarius Hatsutake Tanaka が記載されている。そして「全体脆質の菌にして、蓋の径 5~10 cm、周辺部下方に湾曲し、中央部窪めり。蓋の充分開きたるものは畧扁平となり、或稍漏斗状となる。淡赤褐色、同心環紋を有す。褶茎共に蓋と同色 褶は茎に垂生す。茎は下端少しく尖り、内部中空なり。菌体の傷付たる部分より出づる乳汁は、酸化酵素を含み、空気に触れて藍緑色の汚染を現はす性顕著なり。故に中国地方にては一般に本菌を**あゐたけ**と呼べり。他に**あゐたけ** (*Russula virescens*) なるものあり、其名は蓋の表皮の藍緑色なるに因り、本菌の如く乳汁の色に非ず。(途中省略) 本図は大正二年十月十五日東京市郊外目黒に於て採れり。」の説明とともに、ハツタケの実物大の彩色図が載っている。

この「あゐたけ」には、濱田先生も困惑されたらしい形跡が、前記の『原色版日本菌類図説』の索引の頁への書き込みから伺うことができる(図 1)。和名索引では、**あゐたけ**、**あゐたけ**(いろがはり)、**あゐたけ**(はつたけ)がある。現在からみれば、他種の地方名や異名、俗名の**あゐたけ**は除いて、標準和名の**あゐたけ**だけにしておけばよかったのである。

索引	
あゐひらたけ.....	103
あゐたけ.....	52
あゐらげきくらげ.....	204
あゐらげこべにちやゐんたけ.....	151
あゐたけ.....	5
あゐたけ(いろがはり).....	49
あゐたけ(はつたけ).....	54
あゐよへいじ.....	5
あゐがしらづきんたけ.....	146
あゐじ.....	5
あゐはつ.....	5
あゐずたけ.....	21

あゐたけと
いゝあゐ、どれ
が不明。

図 1 『原色版日本菌類図説』川村清一 大地書院 (1929) の索引の頁への書き込み

『原色日本菌類図鑑（第 3 巻）』（川村清一 風間書房、1954）にも、アイタケの記載がある。この第 3 巻（全 8 巻）だけで、価格は 1,800 円であった。授業料が年間 6,000 円、京都の市電の運賃が 13 円、国家公務員上級職の初任給が 8,700 円の時代であるから、学生では買うことはできなかった。こちらにも濱田先生の蔵書を重宝させていただいた。なお、川村清一氏の図鑑のことは『きのこの教科書』（佐久間大輔 山と溪谷社、2019）に記述がある。

現在使っているこの図鑑は、私が勤めを辞めて菌楽者・雑想楽者を名乗った時に、植物病理学者の M 君から譲り受けた。彼は、なんと、これを古書とはいえ院生時代に自分で買ったのである。「川村図鑑買ったよ」と彼が言ったときの衝撃を今もよく覚えている。この図鑑は、今は図鑑としてよりも読み物として重宝している。また、この寄稿文におけるように適時活用させてもらっている。

この図鑑のアイタケの形態的な説明の下に、「夏季主に山林中に生じ、採って食用とする。味淡和欧米諸国にも普通に産し、一般に食用としてゐる。学名の *virescens* は、緑色の義のラテン語である。」とある。日本植物病理学会初代会長白井光太郎氏（1863～1932）は、*Russula virescens* をアイタケとせず、学名に倣ってミドリハツとでもしておいてくれれば良かったと思う。なお、ミドリタケは、前記二つの川村氏の図鑑にそれぞれミドリタケとミドリダケ、*Hygrophrus Wynniae* B. et Br. が記載されている。また、同種かどうかまでは確認していないが、ヌメリガサ科にミドリタケ、*Chrysomphalina grossular* (Pers.) Norvell, Redhead & Ammirati が実在するらしい。

図鑑には、さらに続けて、「本菌はアキタケと称する他に、アヲハツ・アキヨヘイジ・アヲジ等の方言がある。寛政 11 年（1799 年：萩本注）の著（市岡智寛著：萩本注）三野伊那菌品なる書に『アヲハツ俗青初茸、五六月頃得雨則生繖有緑斑文裏並柄

色白味甘可愛』とあつて、記事は簡単であるが、本菌が旧暦の五六月に生じ、蓋に緑斑紋があつて、褶及び茎が白きことを能く示してゐる。アキヨヘイジは信州諏訪・伊那地方の呼称である。同地方では *Russula* 属の菌をヨヘイジと称し、本菌の蓋が藍緑色なるに由り、アキヨヘイジと呼んで夏季の食用菌としてゐる。又ハツタケをアキタケと称する中国地方では、本菌をナツアキタケと云つて、ハツタケなるアキタケを区別してゐる。」と記述されている。

きのこの方言については、『きのこの語源・方言事典』（奥沢康正・奥沢正紀 山と溪谷社、1998）には、アイタケとハツタケについて、よくぞここまで調べたと感心するほど多くの方言が記載されている。アイタケ・ハツタケの混乱は、標準和名と地方名の混乱だけでなく、アイタケがハツタケの地方名であり、別種の標準和名であることによる混乱である。今になって思うに「私の地方では、アイタケと言うのです」の返事は大いに結構である。アイタケと呼ぶ地方で「これはハツタケだ」といくら言っても話にならない。問題はむしろ、後出しの標準和名のアイタケにあるのだから、こちらを変えてしまえと言いたくなる。市井の人々に地方名をやめて標準和名で話せというのは、僭越さえある。何代も続く生粋の京都人がマツタケを「マツタケ」と発音するのを、「マツタケ」と矯正しようものなら、「へえ、関東はマツタケですか。田舎マツタケどころやあらしまへんな」とやり返されかねない。

反面、全国民が標準語を使うことができ、人も物も日本中どこにでも 1 日で移動でき、多くの野生きのこが栽培化されて市場に出まわる今日では、地方名や属名だけで万事を済ませるというわけにはいかない。標準和名と地方名・俗名は適時使い分けながら共存させることで、後者をその由来とともに、文化遺産として残しておかねばならない。だから、京都の松茸は、マツタケではなく、今もマツタケなのである。

昔からそれぞれの土地で知られていたきのこは、地方名や俗名が先にあり、標準和名は後だから異物同名を避けるべきは、標準和名の方だった。特に、アイタケのように比較的広い範囲で使われている地方名を、別のきのこの標準和名にしたことが混乱の原因であり、標準和名の規則ができた今となっては昔話である。

きのこの和名については、関西菌類談話第 424 回例会（2005 年 6 月 18 日）のセミナー「きのこの標準和名を考える」が開催され、『きのこの語源・方言事典』の著者の一人である奥沢康正氏が、「和名きのこのアラカルトーきのこの和名の付け方」、千葉菌類談話会と関西菌類談話会のそれぞれの牽引者である吹春俊光氏と佐久間大輔氏が、「きのこの和名を活用していくために」、神奈川県県立生命の星・地球博物館の魚類分類学者瀬能宏氏が、「標準和名の安定化に向けて～基本的考え方と最近の動向」と題して講演されている。

現在、全国的に通用する標準和名は、マツタケとシイタケ、それにエノキタケ、ヒラタケ、ブナシメジ、マイタケ、ナメコくらいであると思うが、マツタケとシイタケ以外は、近年の栽培品の普及によって全国に知られるようになった。シメジは、つとに全国的に知られているが実体がない。他方、標準和名は殆ど知られていないのに、俗名が全国的に通用するきのこは、マッシュルームであろう。

マツタケは、みやこまつたけ、やましろまつたけ、いがまつたけ、ひろしままつたけなどと産地の名前をつけて呼ばれているが、これらは地方名や俗名、異名ではなく、産地名あるいはブランドである。ちなみに、都松茸は京都三山（北山、東山、西山）に生える小ぶりで、色が白く、香りが強いマツタケである。岩手県岩泉町立まつたけ研究所の元所長であった吉村文彦氏が、濱田先生の研究フィールドであった尼吹山の近くで、都松茸の復活を目指して「まつたけ復活させ隊（まつたけ十字軍）」運動を展開している。

都松茸に対するものが、地方（京都から見た）で

採れる色が濃くて大きな田舎松茸である。こちらは、京都人が地方を見下してつけた名前である（『松茸』有岡利幸 法政大学出版会、1997）。しかし、都松茸の内実は、都の人々が山の樹木は無論のこと、ススキなど草本植物までも燃料や飼料、肥料などとして千年以上に亘って収奪し続けた挙句の果てに成立した森林法や砂防法（共に 1897 年）のお陰で生えてきたアカマツに伴う産物である。

しかも、都松茸の産地は、昔は愛宕郡や葛野郡、紀伊郡であって、京都市ではなかった。京都市に編入されてからも八瀬・大原や嵯峨・嵐山、伏見・稲荷は京都と認識していない人がいたし、今もいる（『京都ざらい』井上章一 朝日出版、2015）。京都大学と隣り合わせの吉田山（標高 124m と 105m の 2 峰あり）には、戦後もしばらくマツタケが出た。私は濱田先生の部屋で「吉田山 昭和 25 年」と記された巨大なマツタケのアルコール漬け標本を見た記憶がある。京都帝国大学は、愛宕郡吉田村に開設されたのであって、洛中の大学ではなかった。

私は子供の頃には田舎松茸という言葉聞いたことがない。我が家では丹波松茸と呼んでいた。この丹波松茸は、今は超一級のブランド品である。因みに、2020 年 10 月 7 日（水）の京都新聞によると、「とり市老舗」に前日の夕刻に入荷した右京区京北産の初物は 5 本で、その合計重量 140g で 12,000 円であった。京北は今でこそ京都市右京区であるが、2005 年 3 月 31 日までは京都府北桑田郡京北町で、昔も今も紛れもなく旧丹波の国の東端である。

ところで、新種の発見者とは、国際命名規約に従って学名を発表した人である。この発見者が適切な和名も併せて提案することになっている。しかし、往々にして新種であると思ったアマチュアは、名前をつけたがる。仮称でも名前があった方が便利であることは論を俟たない。昔、一時期、私はウミウシの形と色、生殖行動に大変惹かれて、それに関する文献を読んだ際に、『本州のウミウシ』

(中野理枝 ラトルズ、2004) で、インターネットウミウシという命名をみて仰天した。しかし、同じ著者の『日本のウミウシ』(文一総合出版、2018) には「オキナワヒオドシウミウシ」になっている。このウミウシの話は、前記の関西菌類談話会の例会で、吹春氏が、写真を示しながら紹介された。

関西菌類談話会第 27 回きのこ展 (2018 年 10 月 27~28 日) で、異常に伸びたスッポンタケを憎悪に満ちた目つきでじいっと見つめている女性がいた。それで、学名と和名の意味を、邸内に生えるこのきのこを下男に命じて除去させたというダーウインの娘の逸話もまじえながら説明した。その女性は、私が話し終わると無言で立ち去った。和名でも説明に困るようなものがある。例えば「タケリタケ」の説明には、一寸勇気がいるが、実物や写真、描画を見せて御覧の通りと言うほかならう。和名の命名規則はかような命名も防ぐことができるだろう。

真面目に付けられた和名でも、アイタケの他に首を傾げたくなるものがある。私にとっては、その一つが前述の「ツクリタケ」である。この和名の意味が分かる人はそれほどあるまい。今井三子氏が「ツクリタケ」と命名されたそうだが、「サイバイハラタケ」とでもしてもらった方がよほど分かり易いし、分類学的な意味もある。ついでだが、学生時代、3 回生だったと思うが、『Biological Abstract』を読んでいたら、今井三子氏 (1900~1976) の名前が Mitsuko Imai になっていたのも、女性の学者だと思っていた。

わが国で初めてツクリタケの商業的栽培に成功した森本彦三郎氏は、ツクリタケを「西洋松茸」「フランス松茸」「シャンピニオン」と適時使い分けて販売していた (写真 18、19)。京都市伏見区桃山での大正末期から昭和初期にかけての話である。そして戦後は「マッシュルーム」になった。今も立派なレンガ造りの栽培舎 2 棟が残っている (写真 20)。

「マッシュルーム」と「シャンピニオン」は共に

きのこを意味する英語と仏語である。ツクリタケとマツタケは、外見はもとより、生活様式も前者が腐生菌であり、後者は菌根菌であって全く違っている。また、分類学的にも、近年は、前者はハラタケ科であり、後者はキシメジ科である。分類学を無視した命名のいい加減さに憤慨する人もいるだろう。

「西洋松茸」は、森本氏が京都ではきのこには「松茸」を付けないと売れないと思って付けた商品名であると推察する。氏の著作『西洋松茸の年中栽培法』(1926 年の出版と推定) を読んでみると、「松茸」という表現にしばしば出くわすが、これは、無論「西洋松茸」を省略した記述である。



写真 18 森本彦三郎氏の著書(推定 1926 年)



写真 19 栽培舎に書かれた宣伝

しかし、私は、これを読んでいて、しばらくはマツタケが浮かんで大いに困惑した。NHKの「ためしてガッテン」(2020年12月2日放映)で松茸と西洋松茸は、料理ではともに開傘していない子実体が好まれるのが「松茸」としての類似点と言っていたが、着眼に感心した。さすがに今日では、西洋松茸やフランス松茸、シャンピニオンは、その栽培の発祥地の京都でも通用しない。

標準和名でマツタケのつくきのこは、キシメジ科キシメジ属のマツタケ、バカマツタケ、マツタケモドキ、シロマツタケモドキ、ニセマツタケ、アメリカマツタケ、オウシュウマツタケ以外に、モエギタケ科のヤナギマツタケやカブラマツタケ科のカブラマツタケなどあり、キシメジ科ではないきのこまで混ざっている。



写真 20 1932 年頃の森本養菌園(建物は今も国道 24 号線に面して残っている)

それから、バカマツタケは本郷次雄氏の命名だそうだが、方言の「ゾウキマツタケ」や「ナラマツタケ」など、このきのこの生態的特性を表す名前を採用した方が良かったと思う。命名の経緯は、『キノコの細道』(本郷次雄 トンボ出版、2003)に述べられている。濱田先生から、にたり(私は「マツタケに似たり」だと先生から伺った)と馬鹿松茸は同種であると考えるが、比較研究するように依頼され、同種と同定した。この時に、津軽地方の方言である馬鹿松茸を種小名と和名に採用し、それぞれを *Tricholoma bakamatsutake* Hongo と

バカマツタケにしたと経緯が記されているが、津軽地方以外にも広く分布するにも拘わらず、また、本郷氏らしくない和名を付けられた理由を聴き忘れた。

「香り松茸、味しめじ」のしめじも、シメジ科シメジ属のホンシメジ、シャカシメジ、ハタケシメジの他に、同科シロタモギタケ属のブナシメジ、キシメジ科ホテイシメジ属のホテイシメジ、同科ムラサキシメジ属のムラサキシメジ、イッポンシメジ科イッポンシメジ属のイッポンシメジなど、〇〇マツタケの数ははるかに上回る〇〇シメジがあるだけでなく、科・属も多岐に亘っている。

京都市内できのこと言えば、戦前の旧市内(三山に囲まれた内側の更に一回り内側)では松茸、しめじ(ホンシメジ)、椎茸(乾物)、猿の腰掛だけであり、他のきのこは毒松茸(ドクマツタケと発音)と呼ばれていた。しかし、旧市域外では「雑茸(ぞうたけ)」という呼び方をされていたらしい。昨年5月の初めに、小学校に入学したばかりの近所の男児が遊びにやって来て、我が家のクヌギを植えた鉢に生えたヒメワカフサタケ(「盆栽に生えたきのこ」(関西菌類談話会会報 No. 43, 2021))を指して「どくまつたけ!」と言ったので、いまだに「毒松茸か」と驚いた。

『三省堂国語辞典』第7版1刷(三省堂、2014年1月10日発行)の「きのこ」の項は、「しめじとところや木の皮などにはえる柄(エ)とかさのある、やわらかい植物。例、マツタケ・シイタケ。」という40年前の第2版第1刷(1974年1月1日発行)と同じで、生物学的に意味のない記述である。ところが、『広辞苑』第7版第1刷(岩波書店、2018年1月12日発行)には、「子囊菌および担子菌の子実体の俗称。山野の樹林・朽木などに生じ、多くは傘状をなし、裏に多数の胞子が着生。マツタケ、ハツタケ、シイタケのように食用となるもの、テングタケ・ワライタケなど有毒のものがあり、また薬用となるものなど用途も広い。古名くさびら。」とあり、前者とえらい違いだと思った。執筆・校閲

者欄を確認したところ細谷剛〔植物〕とあったので、国立科学博物館植物研究部の細矢剛氏であろうと納得したが、ツクリタケやエノキタケでなくハツタケにはちょっと驚いた。

奥沢氏は、前記の関西菌類談話会のセミナーで、「日本菌学会は早急に和名命名に関し『標準和名検討委員会』を設置し、ガイドラインを提言する」ことを提唱したが、日本菌学会の和名に関する取り組みは、日本菌学会のホームページに掲載されている。即ち、菌学会が2006年より「データベース委員会」を設置し、この委員会内に置いた「学名推奨和名管理事務局」で対応している（「日本菌学会の推奨和名の決定についての手順」データベース委員会 日菌報49:99~101、2008）。

「学会推奨和名」とは、標準和名ではなく、標準和名の制定に際して日本菌学会として、複数学会のすり合わせにより標準和名を決める場に推奨する和名であり、学会での発行物で使われるべき和名である。「学会推奨和名」は、新規の学会推奨和名に適用されるものであって、既存の標準和名は対象外だそうである。前記のバカマツタケと同種のニタリは、オナガザメ属にニタリがいるようで、菌類の和名には採用できない。この一事からも複数学会のすり合わせにより標準和名を決めることは必要不可欠であることが理解できる。

なお、2007年2月1日付の日本魚類学会の「差別的語を含む標準和名の改名とお願い」によると、9つの差別的語を含む魚類の標準和名を改名すべきであるとの結論に達した旨の報告がなされている。この中に「バカ」が含まれている。私は、マツカサキノコモドキやニセマツカサシメジを菌楽の材料にしているが、「モドキ」「ニセ」「ダマン」なども気にいらぬ。あるきのこに似るように進化したきのこにつけるのであればともかく、生物学的に意味のない「偽」や「擬き」「騙し」はどうかと思う。魚類と言わず、すべての生物について差別的語でなくとも、不適切な和

名（属名に反する和名も含めて）を思い切って改名したらと思うが、言うは易くても議論百出で纏められないであろう。

日本菌学会のホームページには、『日本産菌類収覧和名リスト』が公開されており、日本菌学会データベース委員会名で「日本産菌類収覧和名リスト公開にあたって」という文章が付されている。その【注意】の項の2番目に、「複数ページに掲載された和名はそれぞれ別のデータとして扱った（例：アイタケ）、また、複数の学名に対して同一の和名が使用されている場合、それらをすべて収載した、また、同一の和名に対して複数の和名が使用されている場合も、それらをすべて収載した。」とある。ここでもアイタケが引き合いに出されている。まことに因果なきのこである。

ハツタケとアイタケから話がそれるが、奈良を訪ねてから40年ほど経ったある日、私の乗っていた東北新幹線の列車が東京に近づいたとき、すぐ前の座席の乗客が立ち上がって後ろを振り向いた。「え、あいたけさん」と一瞬思ったが、乗客の視線はもっと後ろにあった。それに背が高かった。その人は、作家のS氏と推察した。その理由は、S君が「あいたけさんはS氏によく似ている」と言ったのを覚えていたからである。列車が東京駅に到着すると、私の後方から「Sさん」と呼ぶ声がした。私の同定は正しかったのである。

それにしても、40年もの時を経て変化したであろう女性を同定するとはどういうことか。御苑きのこの会の世話役の佐野修治氏は、「これはカワウソタケの古いもの、これはアズマタケの老菌、これはノウタケの残骸」などと瞬時に同定される。氏は何十年にも亘って、御苑のきのこをそれぞれの種について発生の始まりから終わりまで見ている人である。他方、図鑑には美蕈の、しかも撮影者の最高のできの1枚が載っているだけである。そのうえ、説明文は、同定には簡単すぎるから、古いものや残骸の同定にいたっては至難である。

そう考えて気づいたことがある。作家の S 氏の写真は、出版物に掲載されたり、雑誌に載ったりしているので、私は S 氏のすべての出版物を読まないまでも、書店では時々目にしていたから、S 氏の経年変化が頭に入っていた。すなわち、頭の中の S 氏経年図鑑に基づいて、40 年後の Y 氏を同定した心算が、はからずも図鑑の本人の S 氏であったということである。

この出来事から 10 年ほど経って、今度は女性ではなく、きのこで同じような場面に遭遇した。それで、前記のきのこは関係のない東北新幹線の列車内での話をもち出したのである。マツカサキノコは、外観からはマツカサキノコモドキと区別できないと言われている。私は、マツカサキノコモドキやニセマツカサシメジ、マツカサタケは、毬果に着いてさえいれば、新生蕈、幼蕈、童蕈、青蕈、成蕈、熟蕈、初老蕈、老蕈、萎蕈、倒蕈、腐蕈をなんとか判別できるから、ドイツトウヒ林に行って、マツカサキノコモドキを探す心算になれば簡単に見つかると思っていた。そこで、まず目をつけた場所は、笹ヶ峰高原の京大山岳部の山小屋近くにあるドイツトウヒ林である（2018 年 5 月 17～18 日に現地でマツカサキノコの発生を確認）。1957 年の夏に食料や培養道具一式を担いで 6 時間ほどかけて登った。ところが、はからずも 2005 年 4 月に出川洋介氏からお誘いを受けて、筑波大学を卒業されたばかりの中島淳志氏のご案内で、吹春俊光氏と共に菅平高原のマツカサキノコを観察する機会を得た。

そこで見たマツカサキノコは、ドイツトウヒなどトウヒ属の毬果に生えること以外は、マツカサキノコモドキに似ているどころか、同じであった。これなら水分屈性も有するだろうと推察して実験したところ、マツカサキノコモドキと同じように地下柄は湿度の高い方向に向かって成長した。他方、上田市塩田のアカマツ山の麓に 1 本だけあるドイツトウヒから落下した毬果に生えていたのは、中島氏の同定で、なんと、マツカサキノ

コモドキそのものであった。S 氏をマツカサキノコモドキに譬えるのは申し訳ないが、今から思い返すと、私の見慣れているマツカサキノコモドキ（写真で見慣れている S 氏）に基づいて、見たことがないマツカサキノコ（40 年ほど会っていない Y 氏）を同定した心算が、はからずもマツカサキノコモドキ（S 氏）そのもの（人）であったということは、東北新幹線の列車内での出来事にそっくりである。

これらのきのこは、ヒトとは違った方法ではあるが、マツ科植物の毬果を同定している。きのこ達の同定方法を明らかにするのも菌楽者の楽しい課題ではあるが、いままでの観察データをまとめるだけでも大ごとであるから、自己都合年齢（生物年齢を二乗して 100 で除す）で生きている私でも難しそうである。

ゴヨウマツの盆栽に、たまたまハツタケ（アカハツ？）が生えたばかりに、一風変わった一文を認める羽目になった。作文という作業は、忘れていた記憶を呼び覚ます楽しくもあり、恐ろしくもある行為である。Y 氏は、たまたま郷里のきのこの名前を持ち出ただけだろうが、ハツタケとアイタケはなんと憎らしいきのこであることか。特に後者はハツタケ、カワリハツ、更にはイロガワリと三つの標準和名のきのこ重複する地方名や異名をもっている。

両種は毒松茸どころか、食用茸だそうだが、多重蕈格のお化け、妖怪である。しかし、ハツタケとアイタケの知ったことではない。両種は「きのこ屋の自業自得」と笑っているだろう。

謝辞

アイタケとアカハツについて、それらの発生現場で懇切なご指導を賜った佐野修治氏、ご自宅の邸内に生えたハツタケを観察させて下さった T 氏、マツカサキノコの観察の機会と、このきのこに関する知見をご教示下さった出川洋介先生と中島淳志氏に厚く御礼申し上げます。また、森本養菌園

関係の貴重な写真の掲載をお許し下さった元 2 代目園主森本肇氏に深く御礼申し上げますとともに、ご逝去（昨年 10 月、享年 104 歳）に対して衷心よりご冥福をお祈り申し上げます。

写真と図の説明

- 1 第 25 回関西菌類談話会きのこ展に出品されたハツタケ（京都府立植物園、2016/10/29 撮影）
きのこ展のきのこは、自然から切り離されているとはいえ、京都府以外で採集されたきのこも含めて、沢山の種類のきのこを一挙にまとめて観ることができるまたとない機会である。さらに、近縁種を比較することもできる良い機会である。
- 2 第 26 回関西菌類談話会きのこ展に出品されたハツタケ（京都府立植物園、217/10/28 撮影）
- 3 第 21 回関西菌類談話会きのこ展に出品されたアカハツ（京都府立植物園、2012/10/27 撮影）
アカハツと言うだけあって、ハツタケよりもきのこ全体が赤味を帯びていた。
- 4 第 21 回関西菌類談話会きのこ展に出品されたアカハツ（京都府立植物園、2017/10/28 撮影）
- 5 初老輩のアイタケ（2020/7/24 撮影）
盛期を過ぎたきのこで、何かに食われたような跡がある。アイタケ探しの初日に、これが見つかってほっとした。
- 6 アイタケ？（カワリハツではないか？）（2020/7/21 撮影）
かすり模様がはっきりせず、傘全体が薄い紫色を帯びており、アイタケではなく、カワリハツではないか。背が低く傘が肉厚で頑丈そうな姿である。
- 7 開傘後間もないアイタケ（2020/7/23 撮影）
ちょうど見頃のアイタケである。きのこがそっくり返り、崩壊するまで観察したかったが、

きのこは翌日にはなくなっていた。アイタケを探している人が私の他にいたとは思えないが、きのこを探している人や散歩中の人が変わった色のきのこと思って折り取ったのだろう。それにしても採り方が乱暴である。

- 8 アイタケ？（カワリハツかクサイロハツ？）の幼菌（2020/7/24 撮影）
写真 7 の折り取られたきのこのすぐ近くにあったが、きのこが小さかったうえに、シダの下に隠れていて見えなかったの、取られなかったのだろう。幼菌は薄緑色だったが、かすり模様と思われるものは見えない。カワリハツやクサイロハツの可能性はどうか。5 円硬貨はきのこの大きさに合わせて置いたのであって、ご縁が続きますようにという意味ではない。
- 9 写真 8 の成菌（2020/7/25 撮影）
昨日、未開傘であったアイタケは、傘がきれいに開いていた。かすり模様は開傘してもはっきりしない。さらに、傘の中央部分の緑色がえらく濃いのが気になる。カワリハツにしては傘の緑が鮮やかすぎる。それともクサイロハツ？ 私はアイタケは無論のこと、カワリハツも今までに見た数はごくわずかだし、クサイロハツは見たこともない。
- 10 アイタケの折り取られた跡に群れる蟻（2020/7/25 撮影）
写真 7 のきのこは、24 日が終日雨だったために観に行かなかった。大失態である。蟻がきのこの折れ口に集まっていた。アイタケには蟻を誘引する物質が含まれているらしい。
- 11 ハツタケ（2020/10/25 撮影）
京都市左京区宝ヶ池地区のアカマツの根元の近くに生えていた。傘の周辺部はわずかだが、青変していた。アカマツは樹齢 30 年くらいの比較的若い木であった。京都御苑などアカマツとクロマツの多い場所を選んでハツタケ探しをしたが、見つけることはできなかった。

12 ハツタケ (2020/10/25 撮影)

写真 11 のハツタケの傘の裏側、ひだである。今までに見学したハツタケのひだの色とは幾分違う。ひだの周辺部が既に青くなっていた。

13 アカハツ (2020/10/25 撮影)

クロマツの近くに生えていたアカハツ (前の写真と同じ場所で同じ日に撮影)

迂闊にも写真を撮影する前に手が出た。写真では巨大なきのこに見えるが、小さなきのこである。傘やひだの色が橙色がかっている。

14 ハツタケとアカハツ (2020/10/25 撮影)

両種は自宅に持ち帰って撮影した。ハツタケは標準的な大きさと思うが、アカハツは非常に小さい。アカハツはハツタケに比べて傘とひだの色が明るく、橙色であった。

15 ハツタケ(左)とアカハツ(右) (2020/10/25 撮影)

ハツタケとアカハツのひだの色の比較 (2020/10/25 撮影)

ハツタケとアカハツはひだの色で区別できると言われている。この写真では、両者の違いは明瞭であるが、常にこのようにはっきりしているようには思えない。なお、きのこは乾燥標本にせず、大きな鉢に植わっているクロマツの根元に埋めた。

16 強烈な濃紺のハツタケもしくはアカハツ

(2020/10/19 撮影)

京都市右京区御室地区で、崩壊したハツタケかアカハツを見つけた。樹齢 20~30 年程度の若いアカマツの根元近くにあった。小雨の降る薄暗い林で、濃紺(blue black)の残骸は、形とも相俟って凄まじい感じがした。きのこであることが分からない人が見たらぎょっとするだろう。

17 強烈な濃紺のハツタケもしくはアカハツ、傘の裏側とひだ (2020/10/19 撮影)

写真 16 のきのこを裏返して、傘の裏側、ひだを撮影した。私はこの崩壊したきのこからク

ロアゲハを連想した。

18 森本彦三郎氏の著書 (推定 1926) (森本家より借用)

『西洋松茸の年中栽培法』は 1926 年 (推定) に出版されたツクリタケ栽培のテキストである。日本シャンピニオン (株) 名義の出版になっているが、著者はその会社の技師長であった森本彦三郎氏である。この会社は森本養菌園とは別に 1926 年に設立されたツクリタケ栽培会社であるが、2 年後に倒産し、森本氏は 5 万円 (当時の物価は、進学率が 5%ほどの大学卒の初任給 50~70 円、葉書代 1 銭 5 厘、米 10 kg 2~3 円) の負債を抱え込んだ。この負債は森本氏自らの発明の菌床栽培法によるエノキタケ (子実体) と、エノキタケやシイタケの種菌の販売で得た利益で返済した。当時のエノキタケ (もやしではなく開傘したもの) の値段は、年末になると高級料亭用に 100 匁 (375g) が 3 円ほどで売れた。種菌は試験管 1 本 1 円 50 銭ほどであった。

19 栽培舎に書かれた宣伝 (広告の写し)

森本養菌園のツクリタケ栽培舎に書かれたツクリタケの宣伝である。ツクリタケに「シャンピニオン」ではなくて、「シャンピヨン」という名称が使われていたことは、私はこの写真でしか知らない。この広告は京阪電車の車窓から見えるようになっていたと推察する。

20 1932 年頃の森本養菌園 (建物は今も、京都と奈良を結ぶ国道 24 号線に面して残っている) (森本家より借用)

この写真は「森本彦三郎氏が菌床栽培法と原木栽培用種菌の発明に至った経緯の考察」千葉菌類談話通信、31 号 42~62 (2015) に既に掲載した写真の再録である。煉瓦造の栽培舎 2 棟とその向こうに住居、左端に事務所があるが、現在もほぼ当時の状態が残っている。前の道路は国道 24 号線、道路に並行して JR 奈良線の軌道、住居とうしろの茶園と

の間に京阪電気鉄道の軌道がある（架空電車線を支える架線柱が写真の左、真ん中、右に1対ずつ見える）。

図1 『原色版日本菌類図説』川村清一 大地書院（1929）の索引の頁への書き込み

この書籍は、濱田先生が1946年11月に東京の古書店で購入された古書である。多くの院生・学生らが借用した。従って、誰の書き込みかは断定できないが、私が松毬に生えるきのこを同定するために、1955年11月にお借りした際には、書き込みは既にあった。なお、正誤表に基づく本文への訂正の書き込みも多々あり、その筆跡も同一人であることから、多分先生ご自身の書き込みであろう。この書き込みは、無論、公表されていないが、和名の混乱の一例としてあえて公表させていただいた。

（2021年1月5日受付）

フクロタケの仲間の観察

谷口 雅仁

はじめに

フクロタケの仲間は、ウラボシ科フクロタケ属及びオオフクロタケ属に属する袋状のつぼを持つきのこで、日本では仮称種なども含め 19 種^{注1}が報告されている。筆者は、2018 年から 2020 年にかけて比較的発生が稀と思われる大型のフクロタケの仲間 2 種（クロフクロタケ及びキノオオフクロタケ）を観察することが出来たので、ここに紹介したい。

1. クロフクロタケ

Volvariella volvacea var. *nigricans*

Kawam. ex Hongo

1954 年、川村清一氏によりフクロタケの変種として記載された種^{注2}で、基本種のフクロタケより大型で、つぼが黒褐色を帯びるのが特徴とされる。今関・本郷(1987)は、「本種は本州・沖縄に分布し、おそらく日本西南部には広く分布するものと思われる」としているが、発生の確認は比較的稀なようである。

本種の発生を確認した場所は、筆者の自宅から 400m 程の距離にある松阪農業公園ベルファーム（三重県松阪市伊勢寺町）内の堆肥置き場

で、2019 年 7 月から発生を確認している。この堆肥は、道路の法面等の草刈りで生じた刈草を津市白山町内で堆肥化したもので、公園内の花卉の肥料として使用するために年 2 回ほど運び込まれているものである。（図 1）

発生時期は 7 月から 9 月くらいの高温期で、堆肥内で徐々に菌糸を伸ばしながら次々と発生を繰り返しているように見える。発生の初期はテングタケ属のような卵状で、これを破って 1 日ほどで成菌に成長するが、成菌の寿命は短く 1 日ほどで萎れてしまうようである。（図 2-4）

基本種のフクロタケは中国南部や東南アジアで栽培が盛んな食用きのこであるため、本種についても試食をしてみた。比較的若い幼菌をソテーして食べてみたところ、味にくせは無く美味しいきのこであったが、柄の部分などの菌触りが悪いと感じられた。フクロタケが主に卵の状態のものを食用にされるのは、このためではないかと思われる。

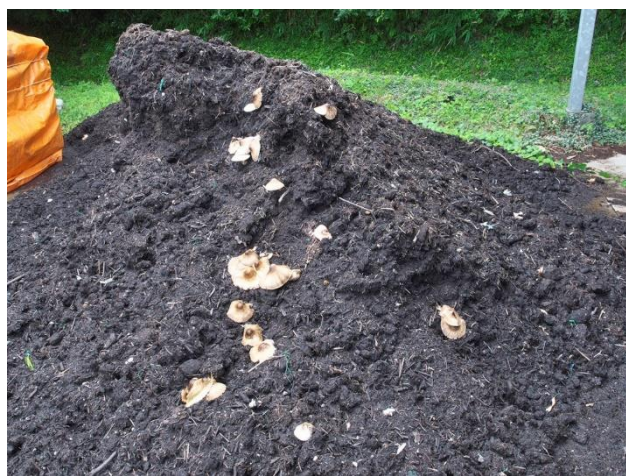


図 1 クロフクロタケが発生する堆肥の山



図 2 堆肥上の発生状況



図 3 卵を破って発生した幼菌



図 4 幼菌の株立ち

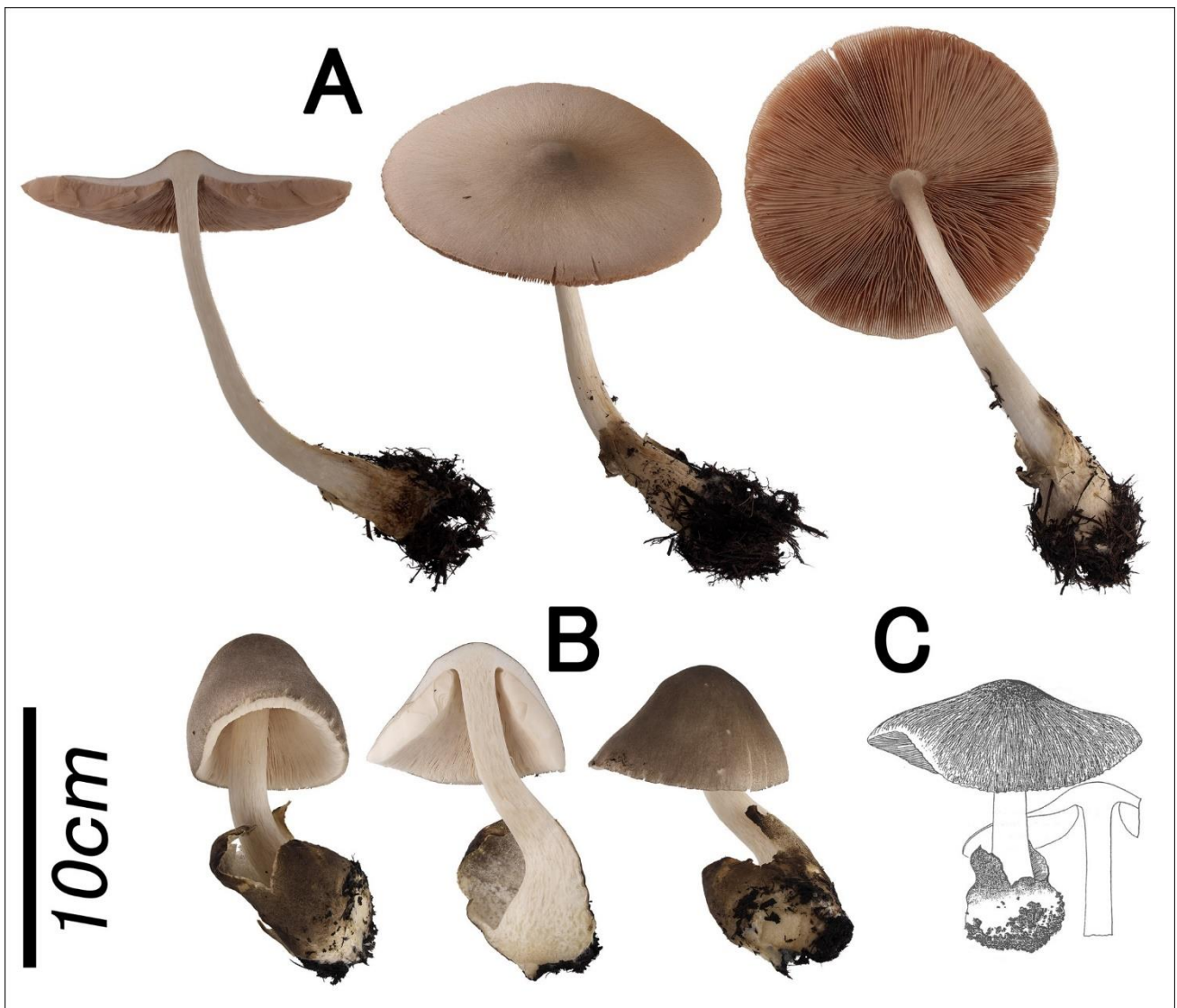


図 5 クロフクロタケ子実体 A: 2020 年 9 月 2 日採集, B: 2019 年 7 月 29 日採集, C: 本郷(1963).

肉眼的特徴の観察

2019 年 7 月 29 日及び 2020 年 9 月 2 日に採集した子実体（図 5 A, B）の肉眼的特徴の比較は表 1 のとおりで、クロフクロタケの記載（本郷(1963)及び伊藤(1959)）と概ね一致した。

成菌（図 5A）の傘のサイズはやや小さめであるが記載の範囲内である。特徴とされる大型のつぼの表面の色は、幼菌のとき基部を除いて全体が黒褐色を帯びているが、成長すると主に下部が伸長して白っぽく見えるようである。

	本標本	本郷(1963)	伊藤(1959)
傘	径 12.5 cm, 鈍頭の円錐形から中高の平らに開き, 表面は類白色のち淡い肉色の地に黒褐色の放射状繊維質の菌糸を被り, 黒褐色のち薄い茶褐色で中央部は濃色. 肉はやや肉色を帯びた類白色. 味, 匂いは温和.	径 8-20 cm, まんじゅう形から中高の平らに開き, 表面は灰褐色, 中央部は黒褐色, 繊維状でしばしば放射状の裂け目をあらわす. 肉は類白色, 柔軟. 味, 匂いは温和.	径 7-20 cm, 初め円錐形のち扁平となり, 中央山形中丘あり. 表面は放射状黒褐色絹糸状被覆を有して黒褐色を呈し, 中央部濃色, 裂目には白肉を現わす. 肉は純白色で, 中部厚く, 周辺は極めて薄い.
ひだ	隔生, 密, 白色のちくすんだ肉色, 幅 11 mm 未満, 縁部は白色粉状にふちどられる.	隔生, 密, 白色のちくすんだ肉色となり, 幅 1 cm 未満, 縁部は粉状にふちどられる.	著しく隔生, 初め白色のち鮭肉色, 密, 幅約 15 mm に及び, 前方広い.
柄	18 cm × 0.8-1.5 cm, 白色からやや肉色を帯びた類白色. 上部に向かって細まり, 基部は球根状, 中実. つぼは, 高さ 7 cm ほどで, はじめ外部に露出している部分が黒褐色を帯び, 成長すると下部が薄色となる, 内面は白色の綿毛状菌糸に覆われる.	10-20 cm × 1-2 cm, ほとんど白色. 上部に向かってやや細まり, 基部は球根状にふくらむ. 大型黒褐色膜質のつぼをそなえる.	10-20 cm × 1-2 cm, 白色, 平滑, 上方に狭細, 基端球状, 中実. つぼは, 甚だ顕著, 高さ 5-9 cm, 厚膜質, 初め白色のち黒褐色を帯び, 内面白色, 遊離する.

表 1 クロフクロタケの肉眼的特徴の比較

顕微鏡的特徴の観察

2020 年 9 月 2 日に採集した子実体（図 5 A）の顕微鏡的特徴の比較は表 2 のとおりで、クロフクロタケの記載（本郷(1963)）と概ね一致するものの、胞子のサイズがやや小さく、縁及び側シスチジアの形状にもやや違いが認められた。

なお、胞子の形状は、側面観（表 2 の胞子画像左上の 1 個）は長楕円形であるが、正面観は縦長の五角形を帯びており、プレパラートに水でマウントした胞子のほとんどが正面観となっているためサイズの測定はすべて正面観で行っている。

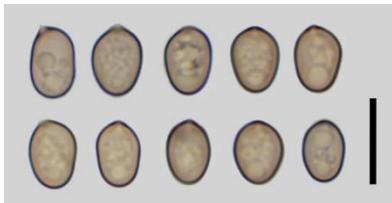
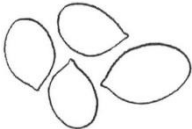
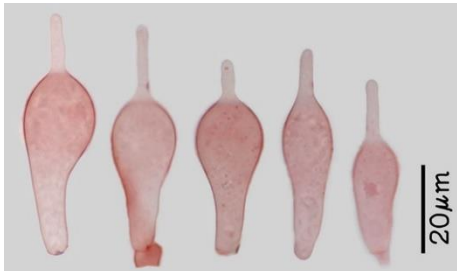
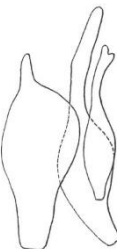
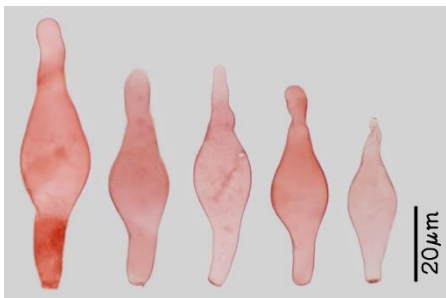
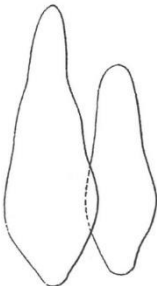
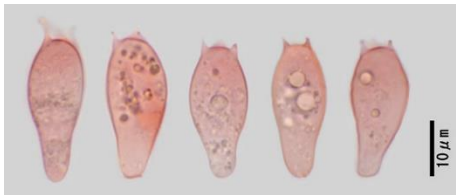
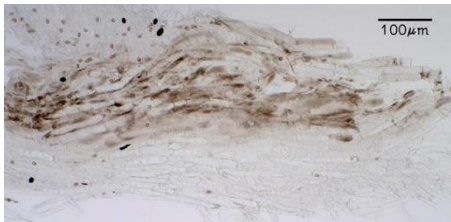
	本標本	本郷(1963)
孢子	$7.4-8.0 \times 5.3-5.8 \mu\text{m}$ (n=41) $Q=1.3-1.4$ 	$7-10 \times 5.5-6.5 \mu\text{m}$ $Q=1.4$ (推定) 
縁シスチジア	$43-52 \times 10-14 \mu\text{m}$ (n=20) 	$43-70 \times 11.5-24 \mu\text{m}$ 
側シスチジア	$50-64.5 \times 14.5-17.5 \mu\text{m}$ (n=9) 	$50-83 \times 10.5-25.5 \mu\text{m}$ 
担子器	4孢子性 $22-26 \times 10-11 \mu\text{m}$ (n=7) 	4孢子性 (サイズ, 線画は記載なし)
傘表皮菌糸	$\text{径 } 12.2-16.0 \mu\text{m}$ (n=10) 	記載なし

表 2 クロフクロタケの顕微鏡的特徴の比較

2. キヌオオフクロタケ

Volvariella bombycina (Schaeff.) Singer

日本では 1938 年、今井三子氏により報告された種で、分布はほぼ世界的とされているが、発生の確認は比較的稀なようである。

本種の発生を確認したのは、三重県林業研究所（三重県津市白山町）敷地内に植栽されたハ

マボウの樹上の枯れた部分からで（図 6, 7）、2018 年 5 月 7 日に同研究所主幹研究員の西井孝文氏から発生の連絡を頂き、翌 8 日に発生状況を確認することができた。同研究所研究員の井上伸氏によれば、以前にもこの場所で同様のきのこの目撃情報があり、その後の 6 月 12 日にも発生が確認されたとのことであった。



図 6 発生状況（2018 年 5 月 7 日撮影：西井孝文）



図 7 発生したハマボウの木
(矢印が発生箇所)

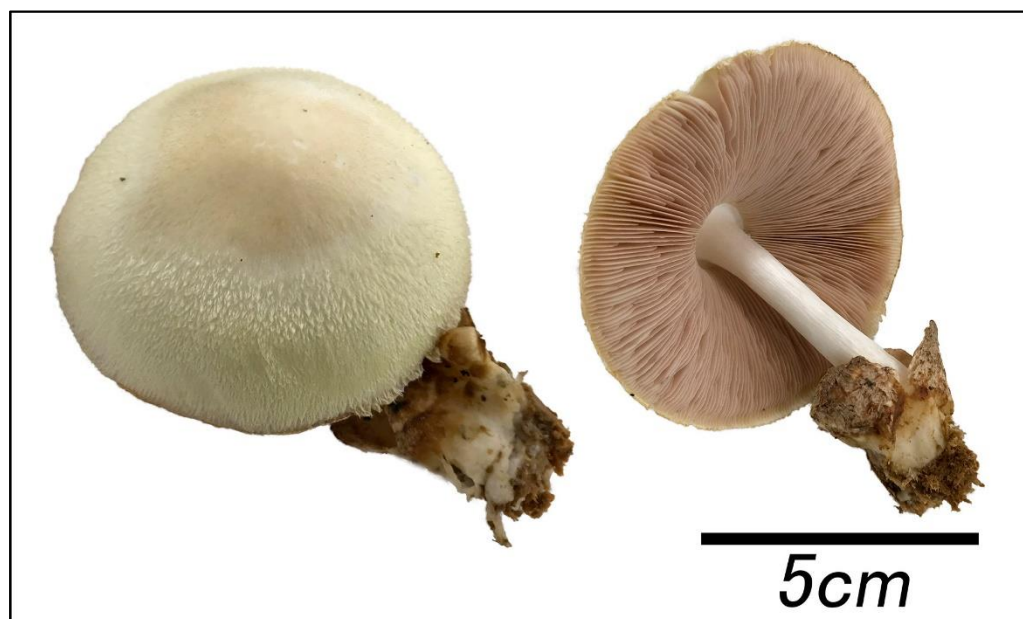


図 8 キヌオオフクロタケ子実体 2018 年 5 月 8 日採集

肉眼的特徴の観察

2018 年 5 月 7 日及び 8 日に観察した子実体（図 8）の肉眼的特徴の比較は表 3 のとおりで、キヌオオフクロタケの記載（今関・本郷(1987)及び伊藤(1959)）と概ね一致した。

サイズは記載と比較してやや小型であるが、まだ完全に成熟していない状態であったため、

もう少し成長するものと思われた。

なお、今関・本郷(1987)では、傘が明るい黄色を帯びるものは北アメリカから報告された *var. flaviceps* に当たるものと思われるとされているが、これについては検討をしていない。

	本標本	今関・本郷(1987)	伊藤(1959)
傘	径 7.5 cm, 鐘形～丸山形で, 中央部はやや盛り上がる, 表面は淡黄色で, 先端が集合する微細な絹糸状の毛に密に覆われるが, 中央部 1/3 ほどは毛が少なくほぼ平滑. 縁部はひだの端から 1 mm ほど突出する. 味は未確認, 匂いは温和.	径 8-20 cm, 初め球形～卵形, のち鐘形～まんじゅう形, ついにはほぼ平らに開く. 表面は類白色または淡黄色で微細な絹糸状の毛または小鱗片に密に覆われ, 粘性はなく, 縁部はしばしばひだの端から 2-3 mm 突出する. 肉は白色で変色性なし.	径 5-20 cm 或いはそれ以上, 初め球形のち鐘形～丸山形, 鈍い中丘を有す. 表面は乾燥し, 白色にて白色～帯褐色の絹糸状繊維を密布し, 中央部に稀に平滑にて暗色を呈し, 周辺は幾分細鱗片状絨毛となる. 縁は平坦, 多少綿絮を有す. 肉は中盤部厚く, 縁に向かって急に薄く, 白色～帯黄色, 柔軟, 臭弱く, 味温和.
ひだ	離生～隔生, 密, 白色のち肉色, 縁部は白色粉状.	離生, 密, 白色のち肉色となる.	離生～隔生, 初め白色のち肉色, 密, 幅広, 便腹状, 稜は腐蝕し幾分粉状, しばしば透明液を出す.
柄	6.5 cm × 0.7-0.8 cm, 白色, 基部はややふくらむ. つぼは, 高さ 2.5 cm, 黄褐色を帯び基部は白色.	6-20 cm × 1-2 cm, ほぼ白色, 中実, 基部は少しふくらむ. 大型, 膜質のつぼをそなえる.	10-20 cm × 0.8-2 cm, 白色, 無毛或いは多少絹糸状, 上方僅か漸細, 下部は球根状, 通常屈曲, 中実. つぼは大型, 広い袋状或いはコップ状鞘として永存し, 厚膜質, 高さ 5-8 cm 或いはそれ以上, 基部約 1/4 癒着, 上部遊離し, 上端通常 3-5 裂する. 表面は汚白色～帯褐色で往々亀裂する.

表 3 キヌオオフクロタケの肉眼的特徴の比較

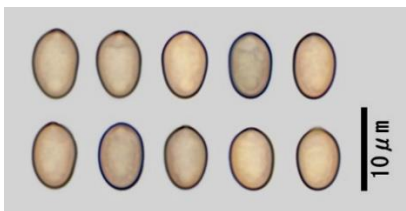
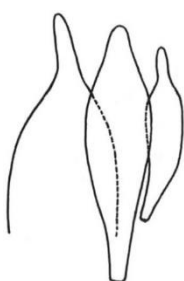
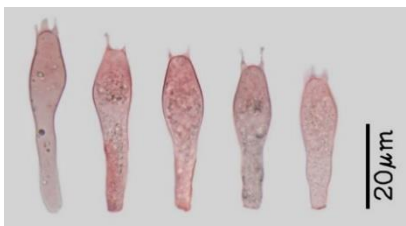
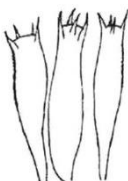
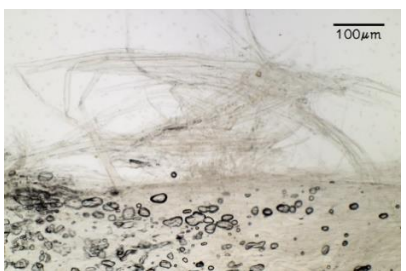
	本標本	今関・本郷(1987)	伊藤(1959)
孢子	7.8-8.2 × 5.2-5.6 μm (n=21) Q=1.4-1.5 	6.5-8 × 4.5-6 μm Q=1.4 (推定) 	6-8 × 5.5-6.5 μm Q=1.2 (推定) 
縁シスチジア	78-117 × 23-36 μm (n=8) 	縁及び側シスチジア 42-110 × 17-37 μm 	42-110 × 17-37 μm 紡錘便腹形～棍棒型 ，先端に毛状或いは 乳頭状突起を有し或 いは鈍頭，薄膜.
側シスチジア	73.5-127 × 18-36 μm (n=10) 		30-92 × 7.5-30 μm 縁シスチジアと同形
担子器	4孢子性 32-39 × 9-9.5 μm (n=18) 	記載なし	4孢子性 (サイズ記載なし) 
傘表皮菌糸	径 10.4-13.1 μm (n=15) 	記載なし	記載なし

表 4 キヌオオフクロタケの顕微鏡的特徴の比較

顕微鏡的特徴の観察

顕微鏡的特徴の比較は表 4 のとおりで、今関・本郷(1987)及び伊藤(1959)の記載と概ね一致するものの、縁及び側シスチジアの形状が、記載では同形としているのに対し、本標本では明らかに違う形状で、縁シスチジアでは先端に細長い指状突起があるのに対し、側シスチジアにはこれが無く鈍頭の棍棒形～ボーリングピン形である。

なお、胞子の計測については、本種においても前種と同様の理由から正面観で行っている。

謝辞

キヌオオフクロタケの観察に当たり、貴重な発生の情報を頂き、写真や標本のご提供を頂いた三重県林業研究所（当時）の西井孝文氏、井上伸氏、観察の許可を頂いた三重県林業研究所に厚くお礼を申し上げます。

注釈

1. これまでに報告されている日本産フクロタケの仲間は 19 種ある。

キヌオオフクロタケ（今井） *Volvariella bombycina*、モリノコフクロタケ（本郷） *Volvariella hypopithys*、ムニンヒメフクロタケ（今井） *Volvariella microspila*、ヒメフクロタケモドキ（松井）、 *Volvariella pubescentipes*、シロヒメフクロタケ（本郷） = ヒメフクロタケ（青木） *Volvariella pusilla*、コフクロタケ（本郷） *Volvariella subtaylori*、クロフクロタケ（川村） *Volvariella volvacea* var. *nigricans*、フクロタケ（川村） *Volvariella volvacea* var. *volvacea*、ヒメシロフクロタケ（糟谷他） *Volvopluteus earlei*、オオフクロタケ（今井、※） *Volvopluteus gloiocephalus*、シロフクロタケ（今井、※） *Volvopluteus gloiocephalus* var. *speciosus*、

Volvariella cf. *caesiotincta*（竹橋他）、 *Volvariella* sp.（竹橋他）、トガリヒメフクロタケ（城川） *Volvariella* sp.、クロヒメフクロタケ（青木） *Volvariella* sp.、コゲチャヒメフクロタケ（青木） *Volvariella* sp.、コツブノヒメフクロタケ（青木） *Volvariella* sp.、ハタケヒメフクロタケ（青木） *Volvariella* sp.、ヤグラフクロタケ（青木） *Volvariella* sp.

※オオフクロタケとシロフクロタケの異同については議論がある。

2. 本種は川村清一氏によって正式に記載されていなかったの「裸名」の状態であったが、本郷次雄氏がラテン語の記相文を補足して正式に記載された。

引用及び参考文献

- 青木実（2008）日本きのこ図版 第 2 巻：テングタケ科・ウラベニガサ科・ハラタケ科（名部みち代編）．日本きのこ同好会 2，神戸．
- 本郷次雄（1963）日本産きのこ類の研究(16)．植物研究雑誌 第38巻 第8号 233-235頁．
- Imai Sanshi (1938) STUDIES ON THE AGARICACEAE OF HOKKAIDO I. Journal of the Faculty of Agriculture, Hokkaido Imperial University 43(1):154-155.
- 今関六也，本郷次雄（1987）原色日本新菌類図鑑（I）．保育社，大阪．
- 伊藤誠哉（1959）日本菌類誌，第 2 巻 第 5 号．養賢堂，東京．
- 糟谷大河，丸山隆史，池田 裕，布施公幹，保坂健太郎（2018）日本新産種 *Volvopluteus earlei*（ハラタケ目，ウラベニガサ科）．日本菌学会報 第 59 巻 第 2 号 47-52 頁．

勝本 謙 (2010) 日本産菌類集覧. 日本菌学会
関東支部, 船橋.

川村清一 (1954) 原色日本菌類図鑑 第5巻
596頁, 第563図.

城川四郎 (2017) 検証キノコ新図鑑. 筑波書
房, 東京.

竹橋誠司, 星野 保, 糟谷大河 (2010) 北海道
産ハラタケ類の分類学的研究: 特にザラミ
ノシメジ属, ツエタケ属, ビロードツエタ

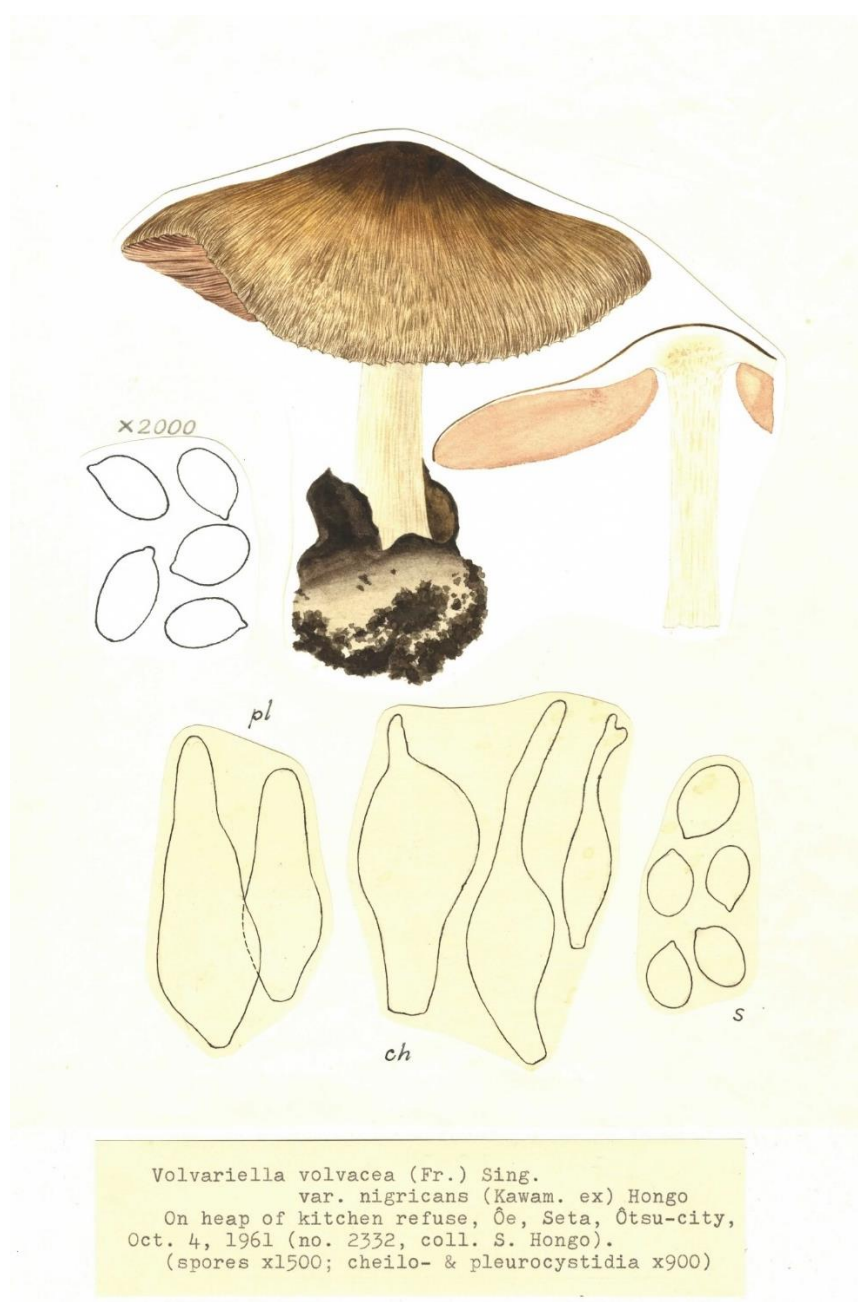
ケ属, フクロタケ属, ウラベニガサ属.

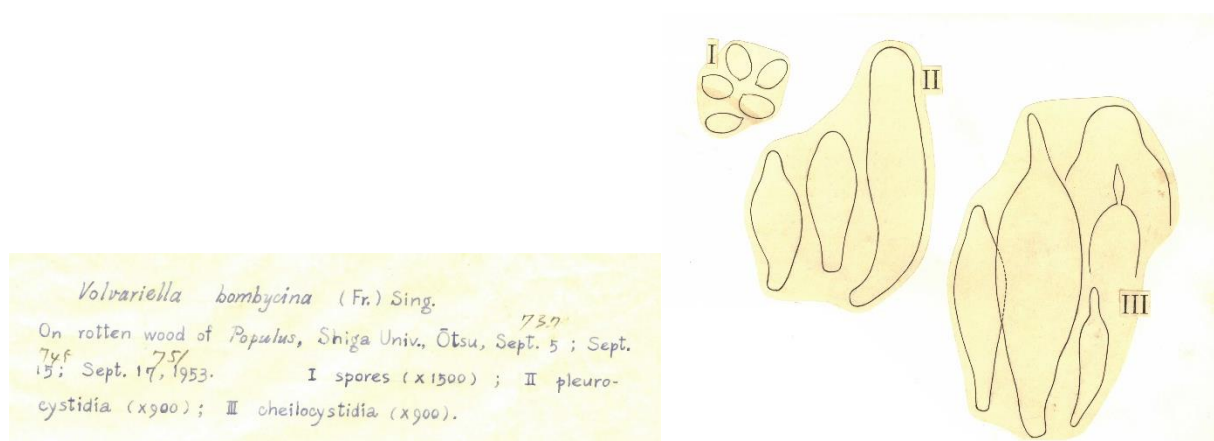
NP0 法人北方菌類フォーラム, 札幌.

(2021年1月27日受付)

次の2つの本郷次雄氏の原画については、大阪
市立自然史博物館より許可を受けて掲載していま
す。これは、JSPS 科研費 23300333 により大阪
市立自然史博物館によってデジタル化されたもの
を提供していただきました。

(編集委員)







談話会便り



森本繁雄氏が日本菌学会教育文化賞を受賞

関西菌類談話会幹事の森本繁雄氏が日本菌学会教育文化賞を受賞されました。

日本菌学会教育文化賞とは、菌学領域における教育、文化、その他発展、普及等の面で顕著な貢献をした人に日本菌学会が授与するものです。

いつも関西菌類談話会の講座や観察会で難しい話も楽しく分かりやすくご説明くださる森本氏ですが、日本菌学会が主催する菌類講座の開催や菌類観察会の発展に尽力されてきました。また、それ以前にも大型菌類の専門家がまだ少なく学習機会の限られていた 1980 年代初めに「幼菌の会」を立ち上げ、2017 年の解散まで定点観察による菌類調査や各種勉強会の開催を通じて菌学を志す若者たちを育てました。当会と「幼菌の会」との関わりについては、ご存じない会員の方もいらっしゃるかもしれませんが、講座や観察会を合同で開催したり、双方の会の世話役を務める人が何人もいたり兄弟会のような緊密な関係にありました。幼菌の会がプロ・アマチュアの研究者を数多く輩出したことはよく知られており、当会の田中会長もその一人です。ここに寄せられた受賞お祝いメッセージの中の思い出にも、キノコの世界で楽しく遊んだ様子が窥えます。

もちろん、森本氏は当会においても菌類観察会・講演会・各種講座の企画運営、会報作成に長年関わり、菌類に興味をもつアマチュアの老若男女に顕微鏡や各種文献を廉価で供給するなど、その研究力向上に努められました。多くの会員が何かとお世話になっています。さらに森本氏は全国多数

のアマチュア団体のまとめ役も果たされ、菌学界におけるプロとアマチュアの連携にも寄与されました。こうした長年にわたる人材育成や菌類研究の支援が評価されての受賞は、本当に喜ばしく、私たちにとっても嬉しいことです。

2020 年 6 月に大阪で開催予定だった日本菌学会 64 回大会での授与式が、新型コロナウイルスによる感染症拡大の影響で中止になり、盛大にお祝いできなかったのは残念ですが、例会が再開したら、またいろいろご指導いただきましょう！

関西菌類談話会



森本繁雄先生、日本菌学会教育文化賞の受賞、心よりお喜び申し上げます。私が、森本繁雄先生と初めてお会いしたのは、1982 年の終わりに先輩の井坪豊明さんに幼菌の会の例会に連れて行ってもらった時のように記憶しています。その際、関西菌類談話会のことも教えてもらい、1983 年春からは談話会の例会に参加するようになりました。談話会にはきのこ以外の大先生や、キャラの立った大先生もおられて、学問あるいは人間社会を勉強する上で極めて役に立ちましたが、如何せん入会したての初学者には大先生がたの話を理解するのも大変だったように記憶しております。「談話会は大先生に教えてもらうのにはええけど、結局、ゆうてることようわからへんしなあ、きのこのことちゃんと勉強するんやったら、幼菌の会の方がええで」井坪さんが言ったのか、あるいは勝手に誰かが言ったように私が思い込んでいるのか今となっては定かではありませんが、月に 1 回、清水山の同じコースを歩いて、きのこを採って、調べて、

ああでもない、こうでもない議論しながらみんな勉強するのは本当に楽しく、ためになり、また、自分の将来を決定づける契機になりました。この民主的な教育方法や自主的な学習形態は縦社会の学校（学問領域）の人から「放し飼い」と評されますが、この「放し飼い」こそが自然科学の本質を理解する人が育つために必要なことだと私は信じております。森本繁雄先生は、群のリーダーとして、群を崩壊しないように導き、かつ個々の羊にやる気を起こさせるのが本当にうまいと思います。幼菌の会と談話会の二足のわらじを履いておられる時は、それぞれの群の特徴を伸ばすよう、幼菌の会解散後は、それぞれの群を相補するようにまとめあげようとしてこられました。最後に、この「放し飼い」の群を導きさらなる菌学教育に貢献いただきますよう関西菌類談話会会長としてお願い申し上げるとともに、育てていただいた一人として個人的にもお礼申し上げたいと存じます。

関西菌類談話会会長 田中千尋

森本さんと幼菌の会（1980年代のころ） 吹春俊光

森本繁雄先生、日本菌学会教育文化賞の受賞、おめでとうございます。

ここでは、私が1982年ころから1986年頃まで学生時代だった頃の、ほんの5年程の短い期間なのですが、その頃の森本さんと幼菌の会を思い出してみることになります。

私は1978年に大学に入学し、1987年3月に大学院を卒業、同年4月に就職で千葉へ移り住んだ。その学生の間に、相良直彦先生にお会いし、きのこの指導をうけることとなった。当時、関西のきのこ団体は、関西菌類談話会が唯一の会で、きのこに関心のある人はその会に入会することになっていた。相良研究室にもそのチラシが貼ってあったと思う。関西菌類談話会では、ほぼ毎月の日帰りの観察会、そして夏の合宿の観察会（図1）が行事で、ハラタケ類のご指導は本郷次雄先生だっ

た。鑑定会では今と変わらぬスタイルで並んだ採集品に本郷先生が名前をつけていく。私はこの同定会できのこを覚えた。

しかしながら、私は二十歳過ぎてからきのこを始めた、しろうと。談話会の会員の皆さんは、今でもそうだが、きのこについて相当にハイブローな方々で、かなり敷居が高い。やっていけるだろうか、大台ヶ原の同定会が終わったあと、きのこが並んだきのこの匂いがする暗い広間で、途方にくれたことを鮮明に思い出す。

そんな中、談話会の会員の中に、比較的若い世代で、きのこをはじめたばかりの人たちがいた。その親分が森本さんだった。談話会で皆が話している内容がわからない。本郷先生の同定がわからない。当時、本郷先生への質問で記憶に残ったものがある。「クヌギタケの特徴はどのようなところ

ろでしょうか?」。「クヌギタケは、クヌギタケの格好をしています」と本郷先生。今なら本郷先生の気持ちもよくわかるが、当時は、きのこの基本的なことも、ぜんぜんわかっていなかった。

そんな初学者がかかえる悩みを引き受けてくれたのが「幼菌の会」(1982年5月～2017年5月)だった。幼菌の会の「幼菌」には深い意味はなく、ほんとうに「初心者」の意味だった。私が持っている会の通信は、たしか手書きコピーの第2号からなので、ほぼ最初から誘っていただいたのだった。森本さんは会長で、副会長は井坪豊明さんだった。森本さんは、お会いしたときから小学校の先生だった。井坪さんは大学院生で、そのあと、京都府の高校の先生となり、JICAで海外へいき、開田高原で宿をひらき、ふたたびJICAで海外へ戻っていかれた。

幼菌の会では、みなどうやって勉強したらよいのか、わからず、テングタケ属担当とか、フウセンタケ属担当とか、勝手に自分で名乗り、ときおり、相当に初歩的なことをセミナー形式で発表して勉強した。場所は京大農学部会議室だった。観察会も月1回の定例観察会を東山で実施。八坂神社前で集合し、將軍塚へあがり、清水寺の方へ下りていくコース。同定会は、お寺の裏の、空いた地面にきのこを広げて名前をつける(図2)。わたしがいた頃はそんな同定会だった。

幼菌の会には、いま思えば立派な人たちが会員さんにいた。村上康明さん(九州大学から滋賀大へきのこの勉強に、のちローザンヌ大学のクレマンソン教授の下で学位を取得)には、野外のハラタケ類調査の方法を教えていただいた。そして服部力さん。服部さんは高校生のときからシンガー先生の本(第三版)をちゃんと読破していて、大学生になって、みんな軟質菌をやっているの、「君は硬質菌」という相良先生のアドバイスを真に受け、1回生のときから毎日硬質菌の顕微鏡図を1種ずつ以上こなすというところざしのある人で、幼菌の会の採集目録に、硬質菌がぐんと増え

た。服部さんが森林総研へ引き抜かれる頃には、独学で日本産の硬質菌の顕微鏡の特徴が全部わかっている人になっており、若い時からリバルデンとか世界的な硬質菌学者と、ちゃんとディスカッションができる人に仕上がっていた。ついでのように言ったらいけないが、今の日本菌学会会長である田中千尋さんも創設時からの会員で、最初のころはきのこ採りをしていたのである。今回の森本先生の受賞は、会員が会長を顕彰したということになってしまうけど、田中教授、ありがとうございます。このように当時から、そしてその後も、不思議なことに、立派な会員さんが沢山所属しているのが幼菌の会だった。

そんな会員をひきいていたのが森本さんだった。みんな幼菌に集って、なごんで、きのこを採った。当時、滋賀県高島市(旧朽木村)にあった朝日新聞社の「朝日の森」も重要な活動の場所だった。所長の島田さんや海老沢さんには、大変お世話になりました。35年以上の京都東山のきのこ長期モニタリングの成果(文献1)も、朝日の森の成果(文献2)と共に発表されているが、幼菌の会の功績は、そのような有形なものにとどまらず、いわば無形文化財的な活動にあったのだと思う。森本さんは、その後、造菌の会、とか、おもしろそうなスローガンをかけ、皆の集まりの場をつくりだし、見守り続けた。その後、2017年に幼菌の会は解散となった。

ちなみに、今回の森本先生への日本菌学会教育文化賞は、相良先生が発起人である。ちょうど同時代に、京都盆地の中で、森本先生のきのこ教育・活動への功績を肌で実感されていた一人が相良先生だったのだと思う。

幼菌の会と森本先生には、ずっと、お世話になりました。幼菌の会が無かったら、私も、関西のきのこ好きの方々も、どうなっていたでしょう。この場をお借りして、森本先生に深く感謝申し上げます。ありがとうございます。

●図の説明

図 1. 関西菌類談話会の観察会

右から森本繁雄、奥田徹（当時：日本ロシユ）、上横手佐知子、川合源四郎（当時：キッコーマン）、吹春。1981年8月26日。奈良県大台ヶ原。



図 2. 幼菌の会の同定会

人の輪の向こう側、左から上横手佐知子、その隣の横縞シャツが森本繁雄。右端は橋屋誠。最初の頃の幼菌の会員は大学生が多かった。1985年7月28日。京都市。



図 3. 幼菌の会の大幹部と浮き輪

右から、森本繁雄（会長）、丸西靖恵、島田良美、井坪豊明（副会長）。真面目なきのこ合宿のはずだったが、きのこが全く無いとわかると、会長は、すぐさま浮き輪を取り出し副会長と女子会員を連れて水遊びへ。1986年8月3日。京都府美山町。



図 4. 朝日の森の森本さん

右から、森本繁雄、服部力、稲葉真由美。結婚前の服部さんたち。1991年11月3日。滋賀県高島市（旧朽木村）。



●文献

（文献 1）Sato, H, Morimoto, S. and Hattori, T (2012) A thirty-year survey reveals that ecosystem function of fungi predicts phenology of mushroom fruiting. PLoS ONE 7(11): e49777.

（文献 2）森本繁雄・服部力（1998）滋賀県「朝日の森」における高等菌類（きのこ）のフロラ（予報）. 森林文化研究 19: 181-193.

森本先生。教育文化賞受賞おめでとうございます！森本先生が長年にわたり幼菌の会を主宰されてきたことが認められたのだと思い、本当に嬉しいです。私が、学部 3 回生の頃、菌の生態をやりたいと、応用植物学の部屋に伺った際、吹春さんより、幼菌の会が月に 1 回、清水山できのこの採集会をやっているののでぜひ参加するようと言われ、八坂神社の山門に行ったのが、初めて森本先生に会った時でした。それから、就職するまでの 6 年の間、月 1 回の例会の他、朽木の森の合宿への参加を通じて、きのこを勉強させて頂きました。

きのこが好きという共通点によって、つながった多種多様な人種(?)を取りまとめることができたのは森本先生のお人柄に尽きると思います。私自身は、例会にはそれほど真面目に参加していませんでしたし、京都を離れてからは、幽霊会員としていました。ですので、このように文章を書くのもおこがましいのですが、それこそ幼菌の会の多様性と思っています。今後とも益々のご活躍を期待しております。

国立研究開発法人森林研究・整備機構
森林総合研究所研究ディレクター 山中高史

菌学会教育文化賞 受賞おめでとうございます。「みえ・菌輪の会」三輪秀子

森本先生が菌学会の教育文化賞を受賞された事を聞いて、シャイな先生がよくぞ受けて下さったなあと共に、相応しい賞を受けられた、と大変嬉しく、感慨深く感じております。

田舎に住んで、きのこに興味を持ち始めばかりの私は、きのこについて勉強できる場所を求めて、今にして思えば無謀であったのですが、幼菌の会へ入会させていただきました。森本先生は同時に関西菌類談話会へも入会するように勧めてくださいました。

この二つの出会いによって、きのこの世界の広

がりと奥深さを知ることができました。

記録のための写真の撮り方、当時一般に普及していなかったパソコンの講座、海外の図鑑の紹介、また、図鑑や本でしか知らなかった研究者の方々と直接お会いすることができたこと、会の運営についても多くを学ばせていただいたことを感謝しております。

直接お会いして受賞のお祝いをしたいところですが、疫病の蔓延によりそれが叶わないことが残念です。

賞としては本懐だった！？

賞というのは、本来、当人の知らないところで決定され、事後に通知されるのが筋だと私は考えてきた。事前に「受けますか？」などと当人に打診したり、履歴書等を要求したりして、候補者となっていることが判ってしまう審査方法はつまらないと思っていた。今回、当人森本氏は、賞を少しも期待しておらず、「困惑」「狼狽」なさっ

相良直彦（大分県在住）

ていた。だから、私の考える「賞」の身になってみれば、ほぼ本懐だったのではないかなと思う。

2017 年 5 月、幼菌の会が解散すると知った時、衝撃を感じるとともに、すぐに、「教育文化賞だ！」と思った。そのころ、教育文化賞の概念が柔軟になって、たとえば「同好会等の設立・運営」も対象とされていたが、そのことは知らなか

った。従来から私が考えていたところの教育文化賞だった。みんなでワッショイとやればいいと単純に考えた。しかし、自分で取りまとめる力はないので誰かに助けてもらわなければならない。そこで、最初の相談を名部みち代氏に持ちかけた。名部氏を選んだ理由はもう覚えていない。名部氏と親しかったわけではない。幼菌の会（清水山）でお会いしたことはあったけれども、森本氏との関係は知らなかった。名部氏は、はじめ、私が京都から発信していると思っておられた。九州の山奥からのラブ・コールが届いたのは幸いだった。

名部氏はすぐに賛同してくださり、以後、事実上の幹事として、協力者を集め腕力を揮って適切

にまとめてくださった。森本氏と近かったのは予期せぬ幸運で、愚図る氏を「脅して賺して観念させ」（名部氏）、必要資料を出してもらうことに成功した。

日本菌学会への「授賞候補者推薦理由書」における推薦者は、相良、吹春俊光、名部 3 名の連名であった。署名は、相良の小学生的な楷書体、吹春氏の風に吹かれ踊るような書体、名部氏の可愛げなお名前と手慣れて落ち着いた書体からなっていた。紙面を眺めて、「素敵だな」と思った。

森本繁雄先生、

この度は、日本菌学会教育文化賞のご受賞、本当におめでとうございます！。心よりお祝い申し上げます。先生に育てていただいた一人として、先生がこの様な素晴らしい賞を受賞された事を、本当に嬉しく思います。

森本先生に初めてお会いしたのは 1988 年、まだ大学生の時でした。あれからもう 33 年！。光陰矢の如しですね。関西菌類談話会や幼菌の会の例会で、キノコの分類や撮影方法を教えていただいた日々が、つい先日の事みたいに思い出さ

れます。先生にはキノコの名前だけではなく、菌類や研究に対する真剣で誠実な姿勢を教えてくださいました。でも決して堅苦しくなく、毒舌ながらもわかりやすく教えて下さいましたね。心から感謝しております。本来ならお祝いにかけつけたい所ですが、関西に伺う事もできず残念です。コロナが落ち着き、例会が再開された折には伺いたいと思います。どうかお身体を大切になさってくださいね。今後ともご指導の程、よろしくお願い致します。

服部真由美

森本先生、おめでとうございます！ 名部みち代

お誘いいただいて関西菌類談話会に入会したのは 2008 年ごろ。初めて出会ってからでもせいぜい 15～16 年程度。それなのに、観察会で一緒するようになってからは、すぐに昔からの知己のような気になってしまいました。

本当に元々怠惰なのか、自分があまり上手くやらないほうが皆さん参加しやすいだろうとの計算

か・・・私の知る限り、森本先生のスライド発表が仕上がっていたことはないように思います。「昨日の晩までパワポ作成やってたけど、飲みすぎてこのへんで寝てしまいました」、ここで皆さん爆笑。なごやかに次の演者につながります。

無理強いすることもなく、いつの間にか人をやる気にさせる名人。ひょうひょうとした風貌の向

こうに人の特質を瞬時に見抜く慧眼が備わっていて、その人ごとに指導も考えておられるに違いない。根っからの教育者なんだなと。だから、きっちり屋の私は、「その辺、適当でええんちゃう？」とか「間違ってたら、後で直しても間に合うで」、「失敗してから、心配したらどない？」といったこと

ばかり言われてきました。おかげで、だんだんユルユルに・・・ 森本先生と出会って、たぶん私は寿命が延びたはず。こんな感謝の言葉ですみません。盛大に受賞をお祝いしたかった日本菌学会大阪大会が中止になって残念でしたが、これからも、ご指導よろしく願いいたします！

私は現在東京都八王子市に在住しておりますが、1989年から6年間、奈良市に居住していました。その時に、関西菌類談話会に入会させていただき、森本先生にお世話になりました。

それ以前は、神奈川キノコの会や関東の幾つかのきのこ会に入会していました。今でこそ、全国のきのこの会でも活動の中で学名を使用することは珍しくなくなりましたが、当時は学名を使うと嫌われるような状況で、関西菌類談話会での観察

会や夏合宿での鑑定時に学名が飛び交う状況に接し、衝撃を受けました。集まってくる人たちのレベルの高さと層の厚さに圧倒されましたが、森本先生らの活動で、幼菌の会と関西菌類談話会が、お互いに良い関係で全体のレベルを押し上げていることを知り、感激した覚えがあります。

この度、森本繁雄氏が2020年度の日本菌学会教育文化賞を受賞されたことを知り、非常に喜ばしく、嬉しく思っています。 松井 英幸

(メッセージは受付順にしております)

関西菌類談話会のいろいろな活動の中から

2019 年 7 月 25 日 上賀茂菌類
観察会



2015 年 10 月 25 日 きのこ展で
の講演



2013 年 7 月 14 日：箕面公園観
察会



2012 年 10 月 27 日：きのこ展
上田俊穂先生ときのこの同定



2012 年 5 月 13 日：きのこ中級
講座Ⅲ（顕微鏡講座）
超初心者用の『手取り足取り講
座』と、中級者対象の『顕微鏡
写真撮影の実践講座』の二つの
コースに分けて実施



2012 年 4 月 8 日：きのこ初級講
座Ⅵ
2011 年度までの講座を踏まえ
た 100 種、200 種の名前当て試
験がありました



2011 年 4 月 10 日：きのこ初級
講座Ⅳ
関西でよく見るきのこ 100 種の
復習と追加 100 種の合計 200 種
を把握するための講座



会報記事投稿のご案内

～皆様の投稿をお待ちしております～

- ◇原則として、投稿者は本会会員に限ります（編集委員会から依頼する場合は例外とします）。
- ◇キノコやカビに関する記事、図、写真やイラスト、本誌に関するご意見などをお寄せください。
- ◇原稿は 1600～2000 字を目処にまとめていただくと幸いです。もちろん、これより多くても少なくてもかまいません。
- ◇写真や図やイラストは、文中でも構いませんし、まとめて送付いただいても構いません。
- ◇原稿は下記の送付先にお送りください。別紙に著者名、連絡先（住所・電話番号・FAX 番号・電子メールアドレス）を書いて添付ください。ワードかテキスト形式のファイルで保存された媒体のものを添付いただくようお願いいたします。また、電子メールでの投稿も歓迎いたします。

◇原稿の採否、掲載の順序、レイアウト等は、編集委員会の決定にお委せください。

◇編集委員会は、著者の原稿中の字句、表、図、写真などのスタイルの統一や変更を求めることがあります。文章の用法上、あるいは、文法上の誤り、その他の修正は編集委員会にお委せください。修正後の原稿は著者にお送りして、再度確認していただくようにいたします。

◇原稿には表題、著者名、本文のほかに必要な場合は引用文献（あるいは参考文献）をあげてください。

◇郵送された図、写真に限り、発行後にお返しします。

◇発行して 2 年後には、会の Web で一般公開されます。

＜原稿送付先＞

関西菌類談話会 会報編集委員会

齋木達也

〒573-0162 大阪府枚方市長尾西町 1-5-23

TEL：072-868-5481

E-mail：mamedebiribo@yahoo.co.jp

編集委員：天野典英、橋本貴美子、堀井雅人、

丸山健一郎、正井俊郎、森本繁雄、○齋木達也

（abc 順・○印は編集委員長）

表紙に寄せて ～日本新産種のチゼレツチガキ（2011/7/31 河内磐船、交野きのこの会にて撮影）～
白く美しいヒメツチグリ属のきのこを発見しました。見た目から、シラユキかシラユリヒメツチガキという名前がいいなと言っていました。これらを研究されている糟谷大河さんにお送りしたところ、「すでに砂浜でも見つけており、新産種発表しようとしているものです。」との返事をいただきました。私たちの発見から 10 年を経て昨年発表されました。（小寺佑三）

編集後記

今月号は、遠方にお住まいの方々から投稿やメッセージをたくさんいただきました。メールでのやり取りや、インターネット視聴、Web 会議など、コロナを経験して、皆さんと交流する手段が拡大してきたようにも感じます。でもワイワイと楽しい観察会は早くやりたいですね。（齋木達也）

*会報の無断での複製（コピー）、上演、放送等の二次利用、翻訳等は、著作権法上の例外を除き禁じられています。

*会報の電子データ化などの無断複製は著作権法上の例外を除き禁じられています。代行業者等の第三者による本書の電子的複製も認められておりません。

*本誌に投稿された記事についての著作権は関西菌類談話会に帰属します。

関西菌類談話会会報 No. 43

2021 年 2 月 10 日印刷

2021 年 2 月 20 日発行

編 集 関西菌類談話会会報編集委員会

発 行 関西菌類談話会

発 行 所 関西菌類談話会

ホームページ <http://kmc-jp.net/>

事務局 〒616-8182 京都市右京区太秦北路町 3-3 309 号

北 岸 阿 佐 子 方

郵便振替口座 00950-0-83129

印刷 印刷通販プリントパックにて

<http://www.printpac.co.jp/>